

## 2022 年度パツへ I-A-1 I-A-2 研究報告書 目次

### パツへ I-A-1

	氏名	ページ
1	POTTER, David M.	1
2	野呂 昌満	3

### パツへ I-A-2

	氏名	ページ		氏名	ページ
1	青柳 宏	5	36	山田 望	75
2	後藤 明	7	37	梁 暁虹	77
3	吉田 竹也	9	38	太田 和彦	79
4	渡部 森哉	11	39	沢田 篤史	81
5	浅石 卓真	13	40	名倉 正剛	84
6	和泉 悠	15	41	蜂巢 吉成	86
7	上峯 篤史	17	42	横森 励士	88
8	中尾 央	19	43	杉原 桂太	90
9	藤川 美代子	21	44	白石 高章	92
10	ANTONY SUSAIRAJ	23	45	塩濱 敬之	94
11	CRIPPS, Anthony	25	46	梅比良 正弘	97
12	WILSON, John	27	47	藤井 勝之	99
13	永田 智成	29	48	横山 哲郎	101
14	小林 純子	31	49	栞原 寛明	103
15	真野 倫平	33	50	稲垣 伸吉	105
16	張 玉玲	35	51	大石 泰章	107
17	上田 薫	37	52	坂本 登	109
18	蔡 大鵬	39	53	杉本 謙二	111
19	小林 佳世子	41	54	中島 明	113
20	奥田 隆明	43	55	本田 晋也	116
21	川北 眞紀子	45	56	張 漢明	118
22	窪田 祐一	47	57	平岩 恵里子	120
23	竹澤 直哉	49	58	村杉 恵子	122
24	松井 宗也	51	59	森山 幹弘	124
25	王 冷然	53	60	森泉 哲	126
26	岡田 悦典	55	61	山岸 敬和	128
27	小原 将照	57	62	吉田 信	130
28	緒方 桂子	59	63	DEACON, Bradley	132
29	榊原 秀訓	61	64	MILES, Richard	134
30	田中 実	63	65	林 慎将	136
31	ALVA, Reginald Joaquim	65	66	深川 裕佳	138
32	大原 寛史	67	67	洞澤 秀雄	140
33	橋本 広大	69	68	永江 亘	142
34	O'CONNELL, Sean	71	69	森山 花鈴	144
35	山田 哲也	73	70	飯田 祥明	146

2022年度  
 パツへ研究奨励金 I-A-1 (特定研究助成・特別)研究成果報告書

2023年 3月 31日

氏名	David Potter	所属	Policy Studies
研究課題	Food Banks in the United States		
研究の種類	個人	グループ	
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>The onset and spread of the covid-19 pandemic since 2020 affected food banks in the United States and the services they provide. Early reports, both academic and from food banks themselves, suggest two contradictory effects. First, supply and distribution operations were interrupted by the pandemic, and new methods of delivery to clients had to be devised in order to reduce the risk of infection. This reduced distribution capacity. Second, lockdowns and quarantines disrupted the economy, which led to higher unemployment and increased food insecurity among vulnerable populations. This resulted in increased demand for food bank services.</p> <p>Based on this, the proposed research posed the following main research question: <u>how were food bank-related networks themselves affected by the pandemic?</u> Were these effects temporary or long-term? A second research question follows from this. <u>How did food banks and their partners change supply and delivery operations?</u> Were these effects temporary or long-term? The primary research question probes for structural changes in these networks that might have been caused by the pandemic, the second question probes for tactical innovations at the final delivery stage.</p> <p>In order to pursue these questions, the researcher conducted fieldwork in the United States from August 10, 2022 to September 11, 2022 as follows. The study consisted of face-to-face <u>interviews</u> with food bank staff and representatives of related agencies, <u>site observation</u>, and <u>materials collection</u> in California, Michigan, and Nevada. The first two states experienced high levels of infection and concurrent economic distress. In order to survey a range of organizations, interviews and site observations will be conducted in the southern, central, and northern parts of California, southern Michigan, and Nevada. In California the study will focus on Los Angeles, Santa Barbara, and Ventura counties (southern), and San Francisco, Sonoma, Napa, and Tuolumne counties (central). These represent regions with different economic and demographic characteristics within the state. Research in Michigan focused on the four counties surrounding Lansing, the state capital. Research in Nevada was restricted to Las Vegas, an urban center in which the tourism sector was highly affected by the pandemic.</p> <p>While the research proposal had posited regional differences among food banks and their responses, the research revealed a fairly standard repertoire of responses to the pandemic. This held for food banks across the regions surveyed regardless of size or demographic characteristics.</p> <p>The research is scheduled to be reported in Academia Social Sciences Issue 25 in June, with a more detailed discussion planned for publication in Nanzan Review of American Studies.</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2022 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-1」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	A Survey of a Pilot Study on Food Banks in the United States	書名	
雑誌名	Academia Social Sciences	論文名	
巻号	25	出版社	Ac
発行年月	2023	出版年月	
ページ	15	ページ	
著者名	David M. Potter	著者名	
備考	済・未（2023年6月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
 パッへ研究奨励金 I-A-1 (特定研究助成・特別)研究成果報告書

2023年3月31日

<b>氏名</b>	野呂昌満	<b>所属</b>	理工学部
<b>研究課題</b>	IoTにおけるレガシーコンポーネントの再利用に関する研究: DXの観点から		
<b>研究の種類</b>	個人		
<b>共同研究者</b>			
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>レガシーコンポーネントを CoTS コンポーネントと位置付けマイクロサービスを経由してアクセスすることで提案したアーキテクチャのもとでアプリケーション設計ならびに実現が可能であることを示した。</p> <p>VR アプリケーションを IoT アプリケーションと位置付け、提案アーキテクチャを適用した。マイクロサービス化は簡易 ESB の上で稼働する仕組みを構築した。これにより、レガシーコンポーネントとマイクロサービスコンポーネントの垂直ならびに水平統合が可能であることを示した。</p> <p>サービス連携については、旧来から、BPEL 等のビジネスプロセス記述言語を用いて行うことが SOA ドメインでは標準とされてきた。しかし、実行効率やオブジェクト指向パラダイムとの親和性からプロセス記述言語の使用は問題であると、我々は指摘してきた。それに代わる有効な手段として、並行プログラミングによるサービス連携を提案し、その実現可能性について事例を持って示した。</p> <p>VR アプリケーションにおける入力デバイスをマイクロサービス化することでレガシーコンポーネントの再利用の実現可能性が示唆できた。記述可能であることを示すだけでなく、実行効率についても必要十分な性能が得られることが確認できた。</p> <p>以上を総括し、新たな事例を以って提案アーキテクチャの妥当性を示すことを予定する。現時点では DX におけるソフトウェアアーキテクチャの果たす役割として、レガシーコンポーネントの再利用に資するものであるとの示唆を得たと考える。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2022 年度南山大学パッヘ研究奨励金 I-A-1」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	VR 環境における文字入力方法に関する研究	書 名	
雑誌名	電子情報通信学会技術研究報告（知能ソフトウェア工学 KBSE2022-2）	論 文 名	
巻 号	Vol. 122, No. 38	出 版 社	
発行年月	2022 年 5 月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	pp. 7-12	ペ ー ジ	
著 者 名	清原隆一，沢田篤史，野呂昌満	著 者 名	
備 考	済	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	予定なし		
②		②	
論文題目	VR 環境における文字入力支援システム	書 名	
雑誌名	ソフトウェア工学の基礎 29（日本ソフトウェア科学会ソフトウェア工学の基礎研究会 FOSE2022）	論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月	2022 年 11 月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	pp. 61-66	ペ ー ジ	
著 者 名	清原隆一，沢田篤史，野呂昌満	著 者 名	
備 考	済	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	予定なし		

2022年度  
パツへ研究奨励金I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2024年2月16日

氏名	青柳宏	所属	人文学部人類文化学科
研究課題	動詞句階層構造仮説に基づく動詞の接辞化と文法化に関する言語横断的研究		
研究の種類	個人	グループ	
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b>（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本特定課題研究の目的は、申請者による昨年度までの研究で明らかになった日本語と韓国語における文法化の程度の違い（雑誌①参照）を動詞句階層構造仮説の下で捉えようとするアプローチの妥当性をさらに検証することにあつた。</p> <p>申請者によるこれまでの研究で日本語の文構造は、[1]のように、語根(<math>\sqrt{\text{Root}}</math>)、動詞化素(<math>\text{little v}</math>)、およびボイス素(<math>\text{Voice}</math>)という義務的な要素に加えて、使役化素(<math>\text{Cause}</math>)、適用化素(<math>\text{Applicative}</math>)などの機能範疇主要部 X, Y, Z に現れ、多層構造をなすという仮説がさまざまな角度から支持されてきた(Aoyagi 2019, 2020, 2021)。</p> <p>[1] [TP ... [XP ... [VoiceP EA [YP ... [vP(=VP) [ZP ... IA ... Z] <math>\sqrt{\text{R}^{\text{v}}}</math>Y]Voice]X]T]</p> <p>2022 年度は日本語の動詞連鎖におけるテ形前項の性質の解明を中心に研究を進めた。日本語の動詞連鎖には前項が語幹（書かせる(<math>\text{kak-ase(-ru)}</math>))、連用形（書き始める(<math>\text{kaki-hazime(-ru)}</math>))のものに加えてテ形のもの（書いておく(<math>\text{kai-te ok(-u)}</math>))がある。</p> <p>まず、Nakatani (2013)、岸本(2021)などの先行研究では、このテを時制辞(T)だとしているが、古語の完了の助動詞ツの連用形に由来する、アスペクト素の一種(<math>\text{asp}</math>)とみなすべきであることが明らかになった。</p> <p>また、前項(V1)がテ形の動詞連鎖には「書いておく」「書いてみる」のように後項(V2)が文法化しているものの、全体の意味が部分の意味から計算できるものに加えて、「(選挙に)打って出る」「(忠告を)切って捨てる」のように意味の合成性(<math>\text{compositionality}</math>)がみられないイディオム的なものもあることを初めて指摘した。ところが、一般に動詞連鎖の結合の緊密性を示すとされる、ハ、モなどの助詞の介入の可否に関しては、前者（書いてはおく、書いてもみる）のみならず、後者（打っては出る、切っても捨てる）でも許される。このことは、イディオム的な V1-te V2 も内部構造を持つことを示唆する。</p> <p>以上のことから、「書いておく」のような後項が一種のアスペクト素(<math>\text{Asp}</math>)に文法化したものは[2a]、「打って出る」のようなイディオム的なものは[2b]の内部構造を持つと考えられる。</p> <p>[2] a. [Asp [asp [vP ... <math>\sqrt{\text{kak}^{\text{v}}}</math>te] ok] b. [v [asp [asp <math>\sqrt{\text{ut}^{\text{te}}}</math>de] v]</p> <p>前者は語根<math>\sqrt{\text{kak}}</math>が動詞化され、項が併合して vP (=VP)まで投射したのちにテが併合するのに対し、後者では語根<math>\sqrt{\text{ut}}</math>に直接テが併合しているという違いはあるが、いずれもテによってラベル付(または投射)が起こっているので、ハやモなどの助詞の併合の対象となりうる。</p> <p>以上の研究成果は、図書①として公刊した。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	The History of Language: Morpho-syntactic Characteristics of Japanese and Korean	書名	『分散形態論の新展開』
雑誌名	Science Impact	論文名	日本語の動詞連鎖におけるテ形前項に関する一考察
巻号	Vol. 2023, No. 1	出版社	開拓社
発行年月	2023年3月	出版年月	2023年12月
ページ	41-43	ページ	55-82
著者名	Hiroshi Aoyagi	著者名	青柳宏
備考	済・未（ <del>年</del> 月頃予定）	備考	済・未（ <del>年</del> 月頃予定）
DOI	<a href="https://doi.org/10.21820/23987073.2023.1.41">https://doi.org/10.21820/23987073.2023.1.41</a>		
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2024年2月27日

氏名	後藤 明	所属	人類学研究所
研究課題	人類の「出ユーラシア」現象解明に係るデジタル・エスノグラフィーの基礎的研究		
研究の種類	個人 <u>          </u> グループ		
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b>（研究経過、研究結果を800～1,000字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究は科研新学術領域「出ユーラシアの統合的人類史学 - 文明創出メカニズムの解明 -」における研究「人工的環境の構築と時空間認知の発達」の一翼を担っている。さらに理化学研究所の研究会「新ホモ・サピエンス学」(2019-2023)、および科研費基盤研究(B)「中世の気候異常期におけるエルニーニョとリモート・オセアニアへの人類拡散」(2022-2025)への共同研究参加に関連して人類の「出ユーラシア」現象解明に係る民族学や考古学利用のデジタル化およびその解析方法研究を主目的とした。</p> <p>その研究対象は(1)カヌーなどの原初的舟のデータベース化と統計的分析、および(2)神話モチーフを中心として言語民族資料の分析であった。</p> <p>(1)に関しては、申請者は2022年10月に刊行された『季刊 考古学』161号の特集「海洋進出の初源史」における論考「太平洋諸島・小笠原諸島」において、オセアニアカヌーの構造を統計分析した結果を中間報告している。さらに2023年に南山大学人類学研究所のモノグラフ第一号として『環太平洋の原初舟：出ユーラシア人類史学への序章』を完成させ、その9章「オセアニアにおけるカヌーの形態と構造の特徴」において、オセアニアのアウトリガー式カヌーの形態を、多変量解析の手法を使って分析し、ニア・オセアニアからリモート・オセアニアへの人類進出にともなってカヌーの形態がどのように（おそらくより外洋航海に適した構造に）変化した過程を示すことができた(Pache助成金に依拠したことは添付資料を参照)。さらに2023年3月に申請者がオーガナイザーとして行われた「出ユーラシアの統合的人類史学 - 文明創出メカニズムの解明 -」のハワイ国際会議（ハワイ大学東西センターで挙行）において、「The Watercraft of Out-of-Eurasia Groups: A Review, a Re-evaluation and Prospects」として発表し、現在印刷中の英文報告書『Trekking the shore, crossing water gaps and beyond』（後藤 明・松本直子編）において発表する予定である。</p> <p>(2)に関しては、DNA解析と神話モチーフの相関関係を元に「人類最古の天文学と天文神話」として発表し、さらに国立民族学博物館の共同研究（小野林太郎代表）において成果を『島世界の葬制』として出版予定で、現在、出版準備中（査読は終わっているが、予算の関係で未刊行）の論文集で申請者は「東南アジア・オセアニアの葬制と他界観」として、東南アジアおよびオセアニアの民族資料の統計分析の結果を考察している。</p>			



## 研究成果公刊（計画を含む）

「2022年度南山大学パツヘ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	「太平洋諸島・小笠原諸島」	書名	『環太平洋の原初舟』
雑誌名	『季刊考古学』	論文名	「オセアニアにおけるカヌーの形態と構造の特徴」
巻号	161号	出版社	南山大学人類学研究所
発行年月	2022年10月	出版年月	2023年3月
ページ	80-82	ページ	141-150
著者名		著者名	後藤 明
備考	未	備考	済
DOI			
オープンアクセス	予定なし		
②		②	
論文題目	「人類とサンゴ:オセアニアを中心に」および「アンソロポリウム:その目すもの」	書名	Trekking the shore, crossing water gaps and beyond.
雑誌名	『海洋:サンゴ礁科学研究—多分野異文化融合の拠点へ—』	論文名	The Watercraft of Out-of-Eurasia Groups: A Review, a Re-evaluation and Prospects
巻号	64	出版社	岡山大学文明動態研究所
発行年月	2023年12月	出版年月	2024年3月予定
ページ	175-181 および 214-218	ページ	未定
著者名	後藤 明	著者名	後藤 明
備考	済	備考	未 (2024年3月頃予定)
DOI			
オープンアクセス	予定あり		予定あり
③		③	
論文題目		書名	2022 『神話研究の最先端』、角南聡一郎・丸山顕誠(編)分担、
雑誌名		論文名	「人類最古の天文学と天文神話」
巻号		出版社	笠間書店。
発行年月		出版年月	2022年12月
ページ		ページ	148-166
著者名		著者名	後藤 明
備考	済・未 ( 年 月頃予定)	備考	済・未 ( 年 月頃予定)
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2022年 11月 2日

氏 名	吉田 竹也	所 属	人文学部人類文化学科
研 究 課 題	バリと沖縄の楽園観光地に生きる観光サバルタンの事例考察を通じた観光リスク論の探究		
研 究 の 種 類	個人	グループ	
共 同 研 究 者			
<p><b>研究実績の概要</b>（研究経過、研究結果を800～1,000字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究は、①現代観光のリスク論的考察、②観光論のパラダイム転換、③本研究課題の民族誌的トピックへの展開、④観光サバルタンの考究、という4つの課題を並行して進めつつ、それらを統合していくものであった。</p> <p>2022年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、昨年度に続いて夏季の海外渡航を見合わせることにしたため、③に関して、インドネシアのバリに出張し資料収集・調査を行うことはできなかった。ただし、昨年度から、SNSを通して最小限の情報収集を行ってはいる。一方、国内では、8月末から9月上旬にかけて奄美大島・沖縄島・石垣島に出張し、資料収集・調査を行った。デスクワークを含めて、その成果は奄美・沖縄の世界自然遺産に関する③の議論に組み込んでいく。10月には、学会発表と合わせ、那覇と奄美の沖永良部島でも資料収集・調査を行った。</p> <p>成果について述べる。①については、共著である『基本概念から学ぶ観光人類学』に論考を掲載した。ほかにも、別稿を準備中である。②については、成果を論文としてまとめ、人類学研究所研究論集に掲載予定であるが、刊行が遅れている。③については、日本島嶼学会の2022年次大会における発表において世界自然遺産関連の内容をまとめた。④については、現在①で触れた別稿においてまとめた考察・記述をする予定で、準備を進めている。</p> <p>研究奨励金は、すべて書籍の購入に充てた。夏季に予定していた調査のための出張を国内のみに変更したことの結果である。</p> <p>昨年度の経験も踏まえ、現地での資料収集があまりできないことを予期し、今年度は当初からデスクワークによるデータの収集・整理と議論構築に注力する方向で研究を進めた。今後、上述した議論をひとつにまとめ、単著にまとめる計画である。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パッセ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書 名	『基本概念から学ぶ観光人類学』
雑誌名		論 文 名	「ホスト/ゲスト, ツーリスト」
巻 号		出 版 社	ナカニシヤ出版
発行年月		出版年月	2022年4月
ペ ー ジ		ペ ー ジ	31-42
著 者 名		著 者 名	市野澤潤平、吉田竹也ほか
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出版年月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出版年月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年 4月 3日

氏名	渡部森哉	所属	人文学部人類文化学科
研究課題	古代アンデスにおける経済システムの研究		
研究の種類	個人	グループ	
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>2022年8月から9月にかけてペルー共和国カハマルカ県に位置するテルレン＝ラ・ボンバ遺跡の第二次発掘調査を実施した。同遺跡は後 8- 10 世紀に台頭したワリ帝国の時代の遺跡である。出土土器の特徴からワリ帝国期に建設され放棄されたと考えられる。</p> <p>今回の発掘調査では第一次発掘調査の結果を踏まえ、建築構造のシーケンスを明らかにすること、埋葬形態の特徴を明らかにすることを主な目的とした。C1 区では長軸 4m 短軸 3m ほどもある大きな埋葬用と思われる楕円形穴を確認した。大部分は荒らされていたが、土を篩にかけることで細かいビーズや金属片を回収することができた。また床上直上に半完形土器が検出されており、墓に埋葬されていた人々に関する重要なデータが得られた。大きな墓は複数のミイラを安置するためと考えられるため、特定の個人ではなくある集団の墓であったと考えられる。</p> <p>C2 区では、建築構造の複雑な更新過程が明らかになった。少なくとも 4 時期に分けることができる。地表から確認できる壁の多くは最終期に属する壁である。ワリ帝国期の地方行政センターの建築構造では、建て替えの証拠は乏しく、むしろ水平方向に建築物を建て増ししていくことが知られている。ただしカハマルカ地方のエル・パラシオ遺跡では複雑な建築構造の更新過程が明らかになっており、テルレン＝ラ・ボンバ遺跡の特徴と類似している。このような建物の更新過程は首都ワリ遺跡でも確認されているため、カハマルカ地方と首都との固な繋がりが認められる。出土遺物が首都とどのような関係を示すかどうかを、今後出土遺物の綿密な分析に基づき明らかにする必要がある。</p> <p>2023年3月にペルーに滞在し、出土遺物の整理作業を行った。その結果、出土土器の大半は、第一次発掘調査で設定した土器タイプに収まることが判明した。新たな土器タイプを 1 つ設定した。また、シカン様式土器として分類している土器群が多く出土し、それらをさらに細分することができる可能性もある。</p> <p>研究成果については順次学術論文として発表していく予定である。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2022 年度南山大学パッセ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	「アンデス研究における理論の系譜」	書名	<i>Agua, tecnología y ritual: función y cosmología hidráulica en el mundo prehispánico</i> , edited by Milton Luján Dávila, Kevin John Lane, and Peter Eeckhout
雑誌名	『人類学研究所研究論集』	論文名	Canales subterráneos en el mundo andino: el caso de la sierra norte del Perú
巻号	第12号	出版社	Ediciones Rafael Valdez, Lima
発行年月	2023.03	出版年月	2022.05
ページ	pp.96-110	ページ	pp.105-132
著者名	渡部森哉	著者名	Watanabe, Shinya
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2023年3月3日

氏 名	浅石卓真	所 属	人文学部人類文化学科
研究課題	学校図書館による授業支援を促す教材検索システムの拡張		
<p><b>研究実績の概要</b></p> <p>本研究では、学校図書館による授業支援を促進するツールとして開発してきた、図書館の蔵書から教材を効率的に検索できる教材検索システム（BookReach）に関して、対応教科の拡張を図った。さらに、BookReach をより効果的に活用するためのツールとして、教員と学校司書との打ち合わせシートの開発・評価も行った。</p> <p>BookReach については、検索システムにキーワード（例：学校）を入力すると、そのキーワードが自動的に分類記号に変換され（例：370）、その分類記号にあたる図書を表示させるシステムを構築した。このために、既存の『小学校件名標目表』と『中学・高校件名標目表』から、キーワード（件名標目）と分類記号の対応表をデータベース化するほか、ポプラ社の百科事典『ポプラディア』の見出し語と分類記号の対応表も作成し、BookReach に組み込んでいる。さらに、国立国会図書館が Web API として公開している NDC Predictor も BookReach 上に実装することで、件名標目表やポプラディアにないキーワードが入力された場合でも、何らかの分類記号に変換されるようにした。これらの機能を実装した web アプリケーションは、既にレンタルサーバ上で誰でも利用できるようになっている。 (<a href="https://bookreach-dev.shuntaroy.com/explorer">https://bookreach-dev.shuntaroy.com/explorer</a>)。</p> <p>打ち合わせシートについては、当初の予定にはなかったが、協力者である学校司書と打ち合わせる中でその必要性が認識されたので、改めて開発を行い教師や学校司書を対象としたユーザビリティ評価を行った。これについても、オンライン上で公開している。 (<a href="https://bookreach.github.io/collaboration-sheet/">https://bookreach.github.io/collaboration-sheet/</a>) 打ち合わせシートに関する開発結果をまとめたものが、日本図書館情報学会誌に掲載された[1]。</p> <p><b>【研究業績】</b></p> <p>[1] 宮田玲・浅石卓真・矢田竣太郎「学校図書館職員と教員の連携を促す打ち合わせシートの開発」『日本図書館情報学会誌』69巻1号, pp.20-37, 2023.</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2019 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	学校図書館職員と教員の連携を促す 打ち合わせシートの開発	書 名	
雑誌名	日本図書館情報学会誌	論 文 名	
巻 号	69 巻 1 号	出 版 社	
発行年月	2023 年 3 月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	20-37	ペ ー ジ	
著 者 名	宮田玲・浅石卓真・矢田竣太郎	著 者 名	
備 考	済	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考		備 考	済・未（ 年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）

2022年度  
 パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2024年 2月 29日

氏名	和泉悠	所属	人文学部 人類文化学科
研究課題	自閉症的特性と日本語再帰代名詞の理解に関する研究		
研究の種類	グループ		
共同研究者	藤川直也（東京大学）・橋本龍一郎（東京都立大学）		
<p><b>研究実績の概要</b>（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究は、日本語の再帰代名詞「自分」の理解と自閉スペクトラム症(以下、ASD)がどのように関係するのかを明らかにすることを目的とするものである。</p> <p>研究グループメンバーでミーティングを行い（4/20, 6/16, 7/21）実験デザインと実験用文章の作成を行なった。和泉は特に実験で用いられる刺激文とフィラー文の作成を担当した。その後 8 月中に東京大学を主体としてオンライン上で実験を行ない、実験結果についての分析・検討をグループメンバーのミーティング行なった（9/5、10/13）。実験の結果は当初の想定とは異なり、非常に複雑なものとなった。</p> <p>当初想定された研究予測を簡単に述べると、ASD 傾向が高い人物は、日本語の再帰代名詞「自分」について、文法をより厳密に遵守するが、その実際の使用については、傾向が低い集団と振る舞いが異なるだろう、というものである。これは、ASD を持つ人物は、英語再帰代名詞についての完璧な文法的知識を持つという先行研究を背景としている。</p> <p>8 月の実験結果を簡単に述べると、いくつかの種類別の文についての判断と、ASD 傾向の高さについて、相関関係が確かに発見されたが、それは予測とはまったく異なる相関であった。</p> <p>想定と異なる結果の解釈と、実験デザインの再考を行うため、上述のミーティングのほかに、さらに 10/27、12/1、1/27、1/28 にもミーティングを行なった。日本語の「自分」だけでなく「自分自身」という別の語を使用すること、そして文について判断をしてもらう実験だけでなく、どれくらいのスピードで文を読むのか計測する「自己ペース読文課題」を使用すべき点などを確認した。</p> <p>また、オンライン実験だけでなく、対面でのデータを取得するため、和泉が南山大学の学部生に参加してもらう形のパイロット実験を 11 月に行なった。なお、個人情報は一切入手せず、日本語文の容認性のみを答えてもらう形式のため、倫理審査申請は行っていない。</p> <p>以上のように、想定とは異なる、さらには解釈の難しい複雑な実験結果が生じたため、いまだ研究成果論文の出版には至っていない。しかしながら、実験デザインについての重要な知見が獲得できたため、今後の研究成果につながることを期待される。</p>			



## 研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パッセ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2023年 2月 8日

氏名	上峯篤史	所属	人文学部人類文化学科
研究課題	黒ボク土の形成年代と層序学的位置に基づく縄文時代草創期・早期の遺物編年		
研究の種類	個人		
共同研究者	なし		
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究では、黒ボク土層と文化層の層序関係を整理する「黒ボク層位法」の確立を目指し、日本列島の人類遺跡とその周辺で採取された黒ボク土層の年代精査に取り組んだ。日本列島各地の丘陵や台地を覆う黒ボク土層は、かつては火山灰を母材とする黒色の腐植土層と考えられ、アカホヤ火山灰の降下年代も視野に入れながら、黒ボク土の形成年代が想定されてきた。一方で、いくつかの放射性炭素年代や、黒ボク土層が縄文時代人の焼き畑活動に由来するという土壌学の知見をふまえると、黒ボク土層の形成年代には地域差が見込まれる。</p> <p>本研究は次の手順で実施した。まず、遺跡および遺跡周辺の露頭にて堆積物を調査し、黒ボク土層の層序的位置を記録した。そのうえで、黒ボク土層の最下部で試料(黒ボク土)を採取し、それを放射性炭素年代測定(AMS年代測定)にかけて、絶対年代を求めた。これらの年代値をもとに、黒ボク土層の形成年代が近似する地域を判断し、その範囲内において、黒ボク土層と遺跡証拠の層序関係を整理した。</p> <p>今年度は長野県仁科三湖周辺と、岐阜県湯ヶ峰山頂付近にて、上記の分析を実施した。仁科三湖周辺では、約 9.2ka に黒ボク土の形成が始まったことを明らかにし、木崎小丸山遺跡(木崎夏期大学遺跡)の堆積物の再検討から、黒ボク土層の層序学的位置を明確にした。その結果、同遺跡の縄文時代堆積物と、再堆積層を明確に区別できたほか、かねてから議論のある後期旧石器時代以前の様相について、その古地形を明らかにした。後者については、2021年度より発掘調査を続けている地点で、下呂石製資料群が検出された層準の年代を、周辺の黒ボク土の年代から把握することを目指した。2022年度の発掘調査では、従来の調査地点から離れたところで黒ボク土の良好な堆積を検出し、それらの放射性炭素年代測定も計画しているところである。現在までに得られた黒ボク土の年代測定結果に照らせば、湯ヶ峰山頂の下呂石製遺物の年代は更新世末に位置づけるのが妥当と判断される。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2022年度南山大学パッへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。			
「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	前・中期旧石器時代遺跡の立地と古地形	書名	
雑誌名	旧石器考古学	論文名	
巻号	87	出版社	
発行年月	2023年3月	出版年月	
ページ	1-11	ページ	
著者名	上峯篤史	著者名	
備考	済（未）（2023年3月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	2024年3月に公開予定		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
 パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年 3月 29日

<b>氏名</b>	中尾央	<b>所属</b>	人文学部
<b>研究課題</b>	古人骨資料と考古学資料の比較検討		
<b>研究の種類</b>	個人	グループ	
<b>共同研究者</b>	なし		
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究の目的は「古人骨資料に関する数理解析結果と関連する考古資料の数理解析結果を比較考察し、人類学と考古学の融合を目指す」ことであった。基本的には以下の研究が進行中もしくは成果発表につながっている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・縄文、弥生、古墳時代の人骨に関して、合計おおよそ 1000 体程度の 3 次元データの収集が完了した。翌年度も引き続き、3 次元データの収集を行っていく。</li> <li>・三次元データの数理解析についても、現状半分程度は終了した。一部については成果発表を行った (後述)。</li> <li>・古人骨データと他の考古遺物との関連の検討は、後者について進捗が遅れているため、あまり進んでいない。次年度以降の課題である。</li> <li>・本助成金の関連業績としては以下を出版できた。</li> </ul> <p>中川朋美・吉田真優・中尾央. 2022. 岡山県 (広島・兵庫県) 出土古墳時代人骨の幾何学的形態測定による分析. 『古代吉備』 33: 43-60.</p> <p>Nakao, H., Nakagawa, T., and Yoshida, M. 2022. 3D data of human skeletal remains acquired by two kinds of laser scanners: Einscan Pro HD and Creaform HandySCAN BLACK™   Elite. Journal of the Nanzan Academic Society Humanities and Natural Sciences, 24: 309-314.</p> <p>Kaneda, A., Noshita, K., Tamura, T., Nakagawa, T., and Nakao, H. 2022. A proposal of a new automated method for SfM/MVS 3D reconstruction through comparisons of 3D data by SfM/MVS and handheld laser scanners. PLOS ONE, 17(7): e0270660. doi.org/10.1371/journal.pone.0270660.</p> <p>中尾央・田村光平・中川朋美. 2023. 人間進化における集団間紛争: 偏狭な利他性モデルを中心に. 『心理学評論』 65(2):119-134.</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	人間進化における集団間紛争：偏狭な利他性モデルを中心に。	書名	
雑誌名	心理学評論	論文名	
巻号	65(2)	出版社	
発行年月	2023/1	出版年月	
ページ	119-134	ページ	
著者名	中尾央・田村光平・中川朋美	著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
 パツへ研究奨励金 I-A-1 (特定研究助成・特別)研究成果報告書

2023年 3月 30日

<b>氏名</b>	藤川 美代子	<b>所属</b>	人文学部人類文化学科 (准教授)
<b>研究課題</b>	海洋動植物の収奪とドメスティケーションをめぐる文化人類学的研究(3)		
<b>研究の種類</b>	個人	グループ	
<b>共同研究者</b>	なし		
<b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)			
<p>2022 年度は日本・韓国・台湾でテングサ・オゴノリを中心とする海藻類の生産・加工・流通・消費の面に力を入れて現地調査を実施した。得られた成果は以下のとおりである。</p> <p>1) 現地調査：三重県鳥羽、静岡県下田ではテングサの採集・乾燥の現場で見られる各海藻の詳細な選別体系を確認することができたほか、海藻の状態に関わる理由の民俗的説明の多様さと分類学的立場から見た科学的な説明との合致とズレという興味深い現象を考察することができた。また、日本では干し椎茸・香辛料などを扱う乾物問屋が韓国・中国・台湾での寒天製造や寒天原藻の仕入れに深く関わっていることもわかった。韓国釜山・済州島では、都市化・観光化・資源の枯渇といった複数の要素が渦巻くなかで、海女による海藻・貝採集の維持と海女文化の継承を試みる複数のアクターの存在とその動きを把握することができた。台湾では、日本統治時代から継続しつつ分断される形で台湾の工業寒天の加工技術が育まれ、寒天製造業者がテングサ・オゴノリの採集者・卸売業者・仲買業者・東南アジアと中国大陸と日本の寒天製造業者の間をつなぎつつ事業を展開しているさまを確認することができた。主に海藻採集の現場に注目していた 2021 年度までではよく見えてこなかった寒天原藻の流通と寒天の製造過程を確認したことで、海藻が世界を分断しつつ接続しているという状況がよりわかりやすく理解できるようになってきたと感じている。一方、調査対象地域を東アジアから東南アジア、アフリカ、中南米へと広げていく必要性を痛感することにもなった。</p> <p>2) 成果発表：『日本民俗学』での原稿掲載のほか、口頭発表「台湾の海女（ハイルー）とテングサの採集・加工・流通」（南山大学人類学博物館講座「南山大学の研究者」、2022 年 6 月 11 日）もした。</p> <p>今後も引き続き、寒天やその他の増粘多糖類の原藻(非養殖・養殖を含む)に関わる生産・加工・流通について、調査・分析を進めたい。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パツヘ研究奨励金 I-A-1」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	「海に生きる女性 一船上生活者と海女一」	書名	
雑誌名	『日本民俗学』	論文名	
巻号	311	出版社	
発行年月	2022年8月	出版年月	
ページ	pp. 90-111	ページ	
著者名	藤川美代子	著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

**2022**  
**Pache Research Subsidy I-A-2(Specified Research Support:  
 General ) Research Result Report**

Date: 13/2/2023

Name	Antony Susairaj	Affiliation	人文学部人類文化学科
Research theme	Vulnerability of Gypsy (Narikuravar) Communities: A Survey on the Socio-economic Challenges of the Narikuravar Community in Idhaya Nagar, Tamil Nadu.		
<p>Summary of research achievements (Please write down the progress and achievements of your research briefly within 320 ~400 words )</p> <p>Execution of the Research</p> <p>The research is done during 18<sup>th</sup> August~11<sup>th</sup> September, 2022 in the Gypsy (Narikuravar) community in the district of Tirupattur, Tamil Nadu, South India. There was two weeks of Field research in the Gypsy community in Idhaya Nagar. I gathered researched materials from the different libraries of Tamil Nadu, and interviewed a number of scholars who are specialized on this topic. I took the support of local researcher in doing field research in the Gypsy Community.</p> <p>Publication of Research Results:</p> <p>The research result will be published in the following Journals.</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. アカデミア 人文・自然科学編第 26 号, 2023 年 6 月刊行予定、原稿提出済。」</li> </ol> <p>論文のタイトル:</p> <p>The Status of Narikuravar (Gypsy) Community: Challenges Faced Transitioning from Their Traditional to Present Occupation.</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2. 『上智アジア学』第 40 号, 2023 年 12 月刊行予定、2023 年 3 月原稿提出予定。</li> </ol> <p>論文のタイトル:</p> <p>Vulnerability of Narikuravar (Gypsy) Communities: A Survey on the Socio-economic Challenges of the Narikuravar Community in Idhaya Nagar, Tamil Nadu.</p> <p>御礼 :</p> <p>I sincerely thank all the members of the Pache Committee for giving this valuable opportunity to do research on this topic.</p>			



Please write down the published researches with clear indication of subsidy support, “2021 Nanzan University Pache Research Subsidy I-A-2”. Please indicate whether the publication has been turned into the Education Planning & Research Promotion Office or not on the “Remarks” column.

Category of “Magazines”		Category of “Books”	
①		①	
Title of the article	The Status of Narikuravar (Gypsy) Community: Challenges Faced Transitioning from Their Traditional to Present Occupation.	Title of the book	
Title of magazine	アカデミア 人文・自然科学編第 26 号	Title of the article	
Volume #	26	Publishing company	
Published date	2023 年 6 月刊行予定、原稿提出済	Published date	
Page		Page	
Author	Antony Susairaj	Author	
Remarks	Done・Not yet (Turn in by: Jun, 2023 )	Remarks	Done・Not yet (Turn in by: )
DOI			
Open access	Done・Scheduled・Unscheduled		
②		②	
Title of the article	Vulnerability of Narikuravar (Gypsy) Communities: A Survey on the Socio-economic Challenges of the Narikuravar Community in Idhaya Nagar, Tamil Nadu.	Title of the book	
Title of magazine	『上智アジア学』第 40 号	Title of the article	
Volume #	40	Publishing company	
Published date	2023 年 12 月刊行予定、2023 年 3 月原稿提出予定	Published date	
Page		Page	
Author		Author	
Remarks	Done・Not yet (Turn in by: Dec, 2023 )	Remarks	Done・Not yet (Turn in by: )
DOI			
Open access	Done・Scheduled・Unscheduled		

2022

**Pache Research Subsidy I-A-2 (Specified Research Support:  
General) Research Result Report**

Date: 13/2/2023

Name	Anthony Cripps	Affiliation	Eibe
Research theme	Designing teaching workshops for pre-service teachers of English		
<p>Summary of research achievements (Please write down the progress and achievements of your research briefly within 320 ~400 words.)</p> <p>This project aimed to research and design teaching workshops for pre-service teachers of English. The key scientific question underlying this research project was: ‘What kind of teaching workshops do pre-service English teachers need?’ Through the creation of dedicated teaching workshops, pre-service teachers of English had the opportunity to improve their understanding of teaching theory and practice. The teaching workshops that this research project created focused on pre-service teachers’ practical needs. Two teaching workshops were held for pre-service teachers of English. In these workshops the pre-service teachers had the opportunity to gain many practical teaching skills.</p> <p>As part of this research project a presentation was given at the IAFOR conference in Hawaii on January 6, 2023. In addition to the presentation, a paper entitled “‘That was a masterpiece!’: Crafting effective workshops for Japanese pre-service teachers of English’ was published in the proceedings of the IAFOR 2023 conference. I also plan to present my findings in the Tomorrow People conference in Bangkok.</p>			

## Published Research Results (Proposal included)

Please write down the published research with a clear indication of subsidy support, "2021 Nanzan University Pache Research Subsidy I-A-2". Please indicate whether the publication has been turned into the Education Planning & Research Promotion Office or not on the "Remarks" column.			
Category of "Magazines"		Category of "Books"	
①		①	
Title of the article	"That was a masterpiece!": Crafting effective workshops for Japanese pre-service teachers of English	Title of the book	
Title of magazine	IAFOR 2023 Proceedings (Online)	Title of the article	
Volume #	1	Publishing company	
Published date	March	Published date	
Page	1-10	Page	
Author	Anthony Cripps	Author	
Remarks	Done • Not yet (Turn in by: )	Remarks	Done • Not yet (Turn in by: )
②		②	
Title of the article		Title of the book	
Title of magazine		Title of the article	
Volume #		Publishing company	
Published date		Published date	
Page		Page	
Author		Author	
Remarks	Done • Not yet (Turn in by: )	Remarks	Done • Not yet (Turn in by: )
③		③	
Title of the article		Title of the book	
Title of magazine		Title of the article	
Volume #		Publishing company	
Published date		Published date	
Page		Page	
Author		Author	
Remarks	Done • Not yet (Turn in by: )	Remarks	Done • Not yet (Turn in by: )

2022

Pache Research Subsidy I-A-2(Specified Research Support:  
General ) Research Result Report

Date: 4/12/2023

Name	John W Wilson	Affiliation	Faculty of Foreign Languages, Eibe
Research theme	Teacher Emotion, and Teacher Written Commentary on students' written compositions and EFL Presentations.		
Summary of research achievements (Please write down the progress and achievements of your research briefly within 320 ~400 words. )			
<p>During FY 2022-2023 I completed several research goals and represented Nanzan University. After my proposal for a paper was accepted to the TESOL France Colloquium, I presented a paper titled, Collaborative Pecha Presentations. More universities are utilizing collaborative presentations due to large class sizes and limited time for students to give presentations in front of a live, authentic audience. This presentation provided materials, fresh ideas and procedures for conference attendees to incorporate collaborative presentations into their pedagogies and course schedules. In January 2023 I presented a paper at the Hawaii International Conference of Education about teacher emotion and submitted an article for the conference proceedings. Finally, I received approval by the Nanzan Ethics committee to conduct research towards my doctoral thesis –see 承認 (承認番号:22-080) and I have begun to accept participants for the study and students have given consent for their compositions to be evaluated and included in the research. I also received ethics approval from University of Exeter in the UK. I am looking for to continuing this valuable qualitative data collection and analysis in order to contribute to knowledge with this empirical exploratory study.</p>			

Please write down the published researches with clear indication of subsidy support, “2022 Nanzan University Pache Research Subsidy I-A-2”. Please indicate whether the publication has been turned into the Education Planning & Research Promotion Office or not on the “Remarks” column.

Category of “Magazines”		Category of “Books”	
①		①	
Title of the article		Title of the book	
Title of magazine		Title of the article	
Volume #		Publishing company	
Published date		Published date	
Page		Page	
Author		Author	
Remarks	Done • Not yet (Turn in by: )	Remarks	Done • Not yet (Turn in by: )
DOI			
Open access	Done • Scheduled • Unscheduled		
②		②	
Title of the article	Professional Development and Teacher Emotion: Finding Equilibrium Through Reflection	Title of the book	
Title of magazine	Hawaii International Conference on Educationm Conference Proceedings.	Title of the article	
Volume #		Publishing company	
Published date	(In print)	Published date	
Page		Page	
Author		Author	
Remarks	Done • Not yet (Turn in by: ) Turned in 1/2023	Remarks	Done • Not yet (Turn in by: )
DOI			
Open access	Done • Scheduled • Unscheduled		

2022年度  
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年 4月 12日

氏名	永田 智成	所属	外国語学部
研究課題	スペインにおける政党システムの変化		
研究の種類	個人	グループ	
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>スペインでは 1983 年の総選挙以降、国政は二大政党を中心に展開されていたが、2015 年の総選挙では多党制へと変化した。その変化の要因について検討し、今後の政党システムの在り方について考察することが本研究の課題であった。</p> <p>一般には、スペインの政党システムの変化について、以下のような説明がなされる。スペインは長らく好景気であったが、2008 年のリーマン・ショックを境に未曾有の大恐慌に陥った。二大政党は十分な対応が出来ず、また二大政党が関与する汚職などが明るみに出て、政治不信が蔓延した。既存政党への反発から、2011 年の 15-M 運動が発生し、その政党化としてポデモスが誕生し、2015 年の政党システムの再編へと至った。</p> <p>しかし、今回研究をしてみると、上記の説明にはいくつかの問題点が浮上した。ひとつは、15-M 運動とポデモスを短絡的に結びつけることは出来ないということである。確かに 15-M 運動もポデモスも既存政党への反発という意味では共通点があるが、ポデモスの設立メンバーは 15-M 運動との関わり合いが薄く、実際ポデモスは初期において 15-M 運動と一線を画していた。そして 15-M 運動は、スペインから国外へウォールストリートのオキュパイといった形で派生していったが、スペイン国内にのみ焦点を当てれば、成功した運動とは言い難い側面が観察できた。</p> <p>またダウンズの中位投票者定理を持ち出すまでもなく、新興政党は一定の議席を獲得するようになると、穏健化し、より多くの支持を集めようとする傾向にある。スペインにおいてもその傾向は見られ、2015 年以降新規に議席を獲得した政党は、2023 年において、様変わりさせている。特に市民党に至っては、今年行われる総選挙において消滅の危機である。</p> <p>結論としては、2023 年の総選挙を見てみないとわからないところがあるものの、2015 年の政党システムの再編は恒久的なものとならない可能性が高い。どのように変化するのかは予測できないところがあるが、結局のところ、二大政党を中心に、連立政権が誕生し、場合によっては二大政党に吸収されるのではないかというのが現在の暫定的な結論である。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2022 年度南山大学パッセ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	スペイン政治における新興政党登場の意味—二大政党制から多党制へ?—	書名	
雑誌名	アカデミア 社会科学編	論文名	
巻号	第25号	出版社	
発行年月	2023年6月	出版年月	
ページ		ページ	
著者名	永田 智成	著者名	
備考	済・未 (2023年 6月頃予定)	備考	済・未 ( 年 月頃予定)
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未 ( 年 月頃予定)	備考	済・未 ( 年 月頃予定)
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未 ( 年 月頃予定)	備考	済・未 ( 年 月頃予定)
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
 パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2023年 3月 27日

氏名	小林純子	所属	外国語学部フランス学科
研究課題	「子ども社会学」の国際比較		
研究の種類	個人	グループ	
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究は、ヨーロッパで広がった「新しい子ども社会学」が、日本、英語圏やフランス語圏において、各国の学術的文脈に応じてどのような展開を見せたのかを明らかにするために、「エイジェンシー」の概念や「社会的に構築される子ども」の考え方が先行研究の中でどのように理解され用いられてきたのかを検討し、「子ども社会学」への関心の高まりの背景、今日的な研究動向と、「子ども社会学」の今後の課題をまとめることを目指していた。</p> <p>主にアラン・プラウト (たとえば『これからの子ども社会学』2017)、元森絵里子ほか (たとえば『子どもへの視角』2020)、レジヌ・シロタほか (たとえば <i>Enfance &amp; culture</i> 2010)、ジェームズほか (たとえば <i>Key concepts in Childhood Studies</i> 2008 [2012]) などの先行研究を参考に、概念、動向、課題のそれぞれを明らかにすることができた。</p> <p>第一に、日本語の「子ども」ということばの多義性である。それは、個別の「具体的な子ども」を意味する場合や、一般的な「子どもというもの」を意味する場合、あるいは「子ども時代」を意味する場合に、英語やフランス語ではそれぞれ別の単語で示されるときに明らかになる。</p> <p>第二に、フランス語圏の課題である。子どもの「エイジェンシー」の概念がフランス語では「子どものメチエ」や「アクターとしての子ども」と読み替えられたが、それは「エイジェンシー」の理論的成果を完全に包含できていない。</p> <p>第三に、ヨーロッパにおける「子ども社会学」への関心とその背景である。「子ども社会学」への関心の高まりは、社会学や教育社会学をはじめとする社会科学的研究の中で理論的・方法論的な変化が生じたことと関連している。</p> <p>第四に、制度化され、業績と成果を生み出し、ひとつの学術分野として認知されるようになった「子ども社会学」の今後の課題である。子ども社会学には、子どものエイジェンシーを指摘するだけでなく、一般的な社会学理論とのつながり、子どもを対象とした他分野との連携、技術の進展と政治的な選択による親子関係の変化の中での社会化理論の再構築などが求められている。</p> <p>「子ども社会学」の国際比較を行うことは、子どもや子どもを取り巻く環境を対象とした社会学的な研究を進展させるための共通の土台を確認することにつながった。</p>			



## 研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パツヘ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	子ども社会学とフランスの社会科学	書名	
雑誌名	フランス教育学会紀要	論文名	
巻号	第34号	出版社	
発行年月	2022年9月	出版年月	
ページ	pp. 89-96	ページ	
著者名	小林純子	著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年3月18日

氏名	真野倫平	所属	外国語学部フランス学科
研究課題	フランスのジャーナリズムと犯罪報道に関する歴史的考察		
研究の種類	個人		
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b>（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>申請者は 2019 年度から 2022 年度にかけて「アルベール・ロンドルとルポルタージュ文学の誕生」として科研費を獲得し、第三共和政期のジャーナリズムについて研究を続けている。第三共和政は新聞自由法が成立しジャーナリズムが飛躍的に発達した時代であるが、その中心となったのは『プチ・ジュール』紙をはじめとする大衆紙だった。そこでは「三面記事」と呼ばれる犯罪報道が新聞の売り上げを伸ばすうえで大きな役割を果たした。本研究では以上の研究を踏まえて、フランスのジャーナリズムにおける犯罪報道の歴史について重点的に研究した。</p> <p>具体的な作業としては、春学期には主に関連資料の入手ならびに読解を行った。資料には、犯罪に関するルポルタージュや、犯罪学・精神医学・政治学・歴史学・民族学・風俗研究等関連領域に関する研究書などを購入した。それに加えて、研究遂行上必要な PC 用品および PC ソフトならびに文具などを購入した。可能であればフランス出張を行いたと考えていたが、コロナの感染状況などを見て最終的に断念した。</p> <p>以上の研究成果を、2022 年 10 月 23 日に大阪大学で開催された日本フランス語フランス文学会 2022 年度秋季大会における、梅澤礼氏・村田京子氏・Marc Renneville 氏との共同ワークショップ「<i>La littérature et le féminicide</i>」において、「<i>Le théâtre du Grand-Guignol et l'esthétique du féminicide</i>」として発表した。同発表は 2023 年 3 月に Renneville 氏の主宰するフランスの web 雑誌 <i>Criminocorpus</i> に掲載された。日本語版「グラン＝ギニョル劇とフェミサイドの美学」も同時に掲載された。</p> <p>「<i>Le théâtre du Grand-Guignol et l'esthétique du féminicide</i>」</p> <p>URL : <a href="https://doi.org/10.4000/criminocorpus.12371">https://doi.org/10.4000/criminocorpus.12371</a> 「グラン＝ギニョル劇とフェミサイドの美学」</p> <p>URL : <a href="https://doi.org/10.4000/criminocorpus.12479">https://doi.org/10.4000/criminocorpus.12479</a></p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パッへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Le théâtre du Grand-Guignol et l'esthétique du féminicide	書名	
雑誌名	<i>Criminocorpus</i>	論文名	
巻号	21/2023	出版社	
発行年月	2023年3月	出版年月	
ページ		ページ	
著者名	Rimpei Mano	著者名	
備考	済	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済		
②		②	
論文題目	グラン＝ギニョル劇とフェミサイドの美学	書名	
雑誌名	<i>Criminocorpus</i>	論文名	
巻号	21/2023	出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名	真野倫平	著者名	
備考	済	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2024年2月21日

氏名	張 玉玲	所属	外国語学部アジア学科
研究課題	在日華僑の生業と生活空間に関する民族誌的研究		
研究の種類	個人	グループ	
共同研究者	なし		
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>2022 年度は、戦後の混乱期から経済的急成長の時期にかけて、日本各地の農山村地域で呉服行商をしていた福清出身華僑の「再移動」、血縁・地縁紐帯の強化および居住する地域社会との関係性に注目し、呉服行商からの職業転換、定住化を目指す華僑の生業・生活の諸相の解明に取り組んだ。具体的には、三重県尾鷲、津及び島根県出雲など地方都市に在住（移住した）の華僑の家族誌（ライフヒストリー）を、彼らの生活、生業の基盤を置く商店街の歴史的発展と結び付けながら整理、分析する作業を行った。</p> <p>従来の福清出身者との異同を見ることでそれぞれの特性を見出すと同時に、福清出身華僑に関するより体系的な枠組みの構築を目指すために、東京都、埼玉県、神奈川県在住の新たな福清出身者（1980 年代以降来日したもの）による生業・生活について、現地調査を行った。</p> <p>これらの調査に基づき、論文・著書をまとめる作業を進めている。本研究のための理論的な枠組みを整理したものとして、右の研究成果「雑誌」の部①に示された通りである。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パツヘ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	文化人類学における華僑華人研究の意義と方法	書名	
雑誌名	人類学研究所 研究論集	論文名	
巻号	第12号	出版社	
発行年月	2023年3月	出版年月	
ページ	pp. 141-159	ページ	
著者名	張玉玲	著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
 パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年 3月 31日

氏名	上田 薫	所属	経済学部経済学科
研究課題	ヒエラルキー組織間のコンテストに関するモデル分析		
研究の種類	個人	グループ	
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>1. 研究経過：従来の集団コンテストにおいては、同一集団内の個人の異質性として能力等の個人の属性の相違が取り上げられることが多く、組織の構造に起因する異質性が考慮されることは少なかった。現実の集団間の競合においては、集団内の構成員は互いにフラットな地位にあって協働しているわけではなく、適用事例に応じて（ヒエラルキー等の）組織構造の違いまで考慮に入れた分析が可能であることが望まれる。こうした要素を導入したモデルを、報告者が従来から研究しているシェア関数アプローチの応用として構築できないかという問題意識が、本研究の出発点である。近年この分野では、構成員間の努力の補完性を導入する試みとして、集団全体の努力が構成員の努力の CES 関数で表すモデルが用いられるようになった。こうした既存研究に関しての整理・検討と並行して、組織の経済学に関する文献収集と検討、さらに消費・生産行動理論における CES 関数の応用や一般化に関する文献の通読などを行った。その結果、構成員たちの努力を変数とし集団全体の努力を値とする「集団効果関数 (group impact function)」を CES 関数から一般の相似拡大的 (homothetic) 関数の場合まで拡張してもコンテストの均衡の存在と一意性が成立することの証明に成功した。また、構成員への報酬体系について、コンテストの勝利確率を最大にするものの特徴づけにも成功した。これにより、考察可能な組織構造の範囲を大きく拡大できることが明らかになった。</p> <p>2. 研究成果：1 に述べた成果の十全な含意を得ることは今後の課題である。その第一歩として、CES 関数の比較的単純な一般化である二段階 (two-level) CES 関数による集団効果関数を仮定した集団コンテストのモデルを構築し、その含意について整理した論文を「明示的内部構造を有する集団によるコンテストについて」という題名で南山経済研究第 37 巻第 3 号に掲載することができた。この一般化だけでも、各競合集団が下位集団を内包するという形での内部構造を持たせることが可能であり、レーシングチームのメカニックグループとレーサー、選挙の運動員集団と候補者等のチームによるコンテストの分析に役立てられる。論文においては、均衡の存在と一意性の証明に加え、下位集団の個人間の貢献の補完性の変化ならびに下位集団内の個人の能力の不均等の程度が、集団内の報酬体系に及ぼす効果を明らかにすることができた。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	明示的内部構造を有する集団によるコンテストについて	書名	
雑誌名	南山経済研究	論文名	
巻号	第37巻第3号	出版社	
発行年月	2023年3月	出版年月	
ページ	161-174	ページ	
著者名	上田薫	著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年4月5日

氏名	蔡 大鵬	所属	経済学部経済学科
研究課題	産業・貿易政策の政治経済学的研究—「不公平な貿易慣行」を中心に—		
研究の種類	個人	グループ	
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b>（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>昨今、米中間の通商政策を巡る報復措置の激しい応酬を受け、中国での生産を、第三国・地域に移管する動きが見られる等、日系企業を含む多国籍企業は多大な影響を受けている。グローバル経済の持続的な発展を実現していくためには、WTO を中心とする自由貿易体制を持続可能なものに改革することが必要不可欠である。そのための、不公平な貿易慣行に効果的に対処するためのルールを提示することは各国政府や産業界の現実的な要請であり、その経済理論的解明も喫緊の課題である。</p> <p>そこで、本研究では、これまでの予備的研究の成果をベースに、国内外企業間の戦略的相互作用、また政府間の戦略的相互作用の両面を考慮しつつ、企業が市場に参入する際に当局が技術開示を要求する「強制的な技術移転」などの不公平な貿易慣行を採用するインセンティブとその影響を明らかにした。</p> <p>強制的な技術移転を巡っては、中国政府は外国企業の複合機やプリンターなどのオフィス機器を対象に、中国国内で開発や設計、生産するよう要求する検討に入っているなど、日本でも話題になった。研究期間中では、外国企業を受け入れるホスト国の政府が強制的な技術移転を政策として選択するインセンティブおよび強制的な技術移転が国内外の企業への影響について分析し、その成果を学術論文 “Why Do Governments Embrace R&amp;D-intensive FDI Subsidies? Rationale and Strategic Potential” にまとめた（現在、修正したものを再投稿準備中）。</p> <p>研究期間中では、また、重度の公害を引き起こす産業に対して省エネと排出削減を義務付ける環境規制が、企業のイノベーションと環境パフォーマンスに対して与える影響について、中国の上場企業のデータを用いて解析した。その成果を学術論文 “Environmental Regulation, Innovation, and Environmental Performance: Evidence from China” にまとめ、公表した。環境規制が企業の環境パフォーマンスの改善を促進する一方、イノベーション活動を抑制することを明らかにしたと共に、イノベーション活動が環境規制と環境パフォーマンスの間に抑制効果を生み出していることも確認した。</p>			



## 研究成果公刊（計画を含む）

「2022 年度南山大学パッへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Environmental Regulation, Innovation, and Environmental Performance: Evidence from China	書名	
雑誌名	『経済科学』	論文名	
巻号	Vol. 70, No. 4	出版社	
発行年月	2023年3月	出版年月	
ページ	79-91	ページ	
著者名	WU Ge, LU Zhongyang, CAI Dapeng	著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI	10. 18999/ecos. 70. 4. 79		
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年 4月 7日

氏 名	小林 佳世子	所 属	経済学部
研 究 課 題	進化心理学および行動経済学の視点からみた経済学における合理性		
研 究 の 種 類	個人		
共 同 研 究 者			
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本書籍は、脳神経科学、生物学、心理学、経済学といった文理を超えた研究者による共著の書籍として、「合う、合わない」をキーワードとして、ヒトに組み込まれたメカニズムを議論することを予定している。刊行は、2023 年度中を予定している。</p> <p>申請者の担当する章では、他者の視線の存在が向社会性に与える影響について議論している。今日、行動経済学を含む実験の科学において、再現性が大きな問題となっている。今回議論する視線と向社会性の関係も、まさにこの再現性という意味で大きな議論を呼んでいるテーマでもある。そこで、再現性の問題についてどのような議論がなされるべきかという点についても、本章で議論を行っている。</p> <p>社会的生物として、ヒトは他者の視線を敏感に感じ取る傾向を強く持つ。問題は、視線の存在を感じさせる「偽の」シグナルが、ヒトの社会的振る舞いを変えるか否かという、いわゆる“watching-eye effect”と呼ばれる効果の存在である。</p> <p>効果の存在を報告した研究が数多く存在することは事実であるが、他方で再現に失敗したという報告もまた多数存在し、その再現性への強い疑義が申し立てられている。</p> <p>そんな中で、「再現に失敗」と主張する報告の全てが、必ずしも「再現に失敗」したものではない可能性を本章で議論している。つまり、実験現場の人数や、刺激への提示時間、刺激の構成方法など、実験の要素が結果に影響を与えた可能性を議論している。そもそもヒトが持つバイアス（認知の傾向）というものは、本来的に「ある」か「ない」かといった単純な二分法はなじまない。ある状況下ではその効果は強まり、別の状況下ではその効果は弱くなるというように、複数の要素が効果に影響を与えると考えるべきである。その視点を取り入れると、「再現に失敗」という実験の少なくとも一部は、むしろその境界条件を明らかにしたととらえることが可能となる。</p> <p>現時点で分かっている境界条件を鑑みた時、いわゆる“watching-eye effect”は、恐らく限られた条件の下でその力を発揮するものと思われる。それは、集団でしか生きてゆけない社会的生物としての、「評判」を無視できない認知メカニズムの反映であると考えている。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パッヘ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書名	あなたとわたしを合わせる心理メカニズム
雑誌名		論文名	あなたと目が合うと、ちゃんとしてしまう私
巻号		出版社	ミネルヴァ書房 y
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	小林佳世子
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	未（2023年 12月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年 1月 25日

氏 名	奥田隆明	所 属	経営学部
研究課題	周遊型観光消費モデルの小地域への展開 ～複数交通ネットワークの連携効果の計測～		
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>この研究の目的は、企業が持つ携帯位置情報（観光ビックデータ）を活用して、小地域を対象にした周遊型観光消費モデルを開発し、交通ネットワークの連携効果を計測することにある。今年度はこの研究の最終年度に当たり、昨年度開発した市町村レベルの周遊型観光消費モデルを用いて、リニア新駅とその周辺地域との観光連携の効果について分析を行った。また、流体力学等で用いられる「場の理論」に基づいて、これまで開発してきた周遊型観光消費モデルが導出できることを明らかにした。加えて、高速鉄道投資が進む中国の中小都市（湛江市）においても、高速鉄道新駅（湛江西駅）が抱える課題と、その解決策について整理した。以下では、その論文の内容について簡単に述べる。</p> <p>1) 高速鉄道投資に伴う観光連携の強化について～サービス・ドミナント・ロジックの視点から～、日本地域学会年次大会・学術研究発表論文集、Vol. 59、奥田隆明・張 銘 都道府県レベルと三重県内の市町村レベルの観光消費を分析する 2 階層の周遊型観光消費モデルを開発した。また、このモデルを用いて、リニア新駅と周辺地域との観光連携の効果について分析を行った。分析の結果、伊勢志摩地域やリニア新駅が設置される亀山市の観光サービスの変化が県内の観光地に広く影響を及ぼすことなどを明らかにした。</p> <p>2) 「計算可能な周遊型観光消費モデル」再考～場の理論の視点から～、応用地域学会研究発表大会、Vol. 58、奥田隆明・張 銘 ミクロ経済学の消費者行動理論に基づいて観光客が周遊の中で行う観光消費モデルを導出し、これを「場の理論」に基づいて集計化することによってマクロな周遊型観光消費モデルを導出した。また、各観光地にそれ以降の周遊に必要なサービスを生産する企業を仮定することにより、同様な周遊型観光消費モデルが導出できることを明らかにした。</p> <p>3) 北部湾都市群における鉄道駅周辺の機能向上について～湛江西駅を例にして～、日本地域学会年次大会・学術研究発表論文集、Vol. 59、張 銘・奥田隆明 北部湾都市群の典型的な都市の一つとして湛江市を取り上げ、その高速鉄道駅（湛江西駅）が抱える課題とその解決策を整理した。このとき、湛江西駅を交通サービスのプラットフォーム、その周辺地域を都市サービスのプラットフォームと捉え、域外から来る観光客と、域内に住む地域住民という 2つの主体との価値共創という観点から、その課題と解決策を整理した。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2022 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	高速鉄道投資に伴う観光連携の強化について～サービス・ドミナント・ロジックの視点から～	書 名	
雑誌名	日本地域学会年次大会・学術研究発表論文集	論 文 名	
巻 号	Vol. 59	出 版 社	
発行年月	2022 年 10 月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	Web ページ	ペ ー ジ	
著 者 名	奥田隆明・張 銘	著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目	「計算可能な周遊型観光消費モデル」再考～場の理論の視点から～	書 名	
雑誌名	応用地域学会研究発表大会	論 文 名	
巻 号	Vol. 58	出 版 社	
発行年月	2022 年 12 月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	Web ページ	ペ ー ジ	
著 者 名	奥田隆明・張 銘	著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目	北部湾都市群における鉄道駅周辺の機能向上について～湛江西駅を例にして～	書 名	
雑誌名	日本地域学会年次大会・学術研究発表論文集	論 文 名	
巻 号	Vol. 59	出 版 社	
発行年月	2022 年 10 月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	Web ページ	ペ ー ジ	
著 者 名	張 銘・奥田隆明	著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）

2022年度  
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年 4月 7日

氏名	川北真紀子	所属	経営学部
研究課題	企業の芸術支援による組織内外の関係性構築に関する研究		
<p><b>研究実績の概要</b>（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究の目的は、企業の支援する多様な芸術が組織内外との関係性に及ぼす効果を体系的に捉えることである。本年度はこれまで取材してきた事例をもとに、フレームを提示し、アウトプットする年となった。以下の2つのアウトプットと多くの講演を行った。</p> <p>&lt;図書&lt;出版&gt;</p> <p>『アートプレイスとパブリック・リレーションズ：芸術支援から何を得るのか』，共著，2022年11月30日，中央経済社</p> <p>これまでの研究の集大成として、有斐閣から学術図書を出版することができた。そこでは、企業が芸術支援を行っている8つの事例を詳細に記述しただけなく、それを整理するフレームを提示した。アートプレイスを相互作用性と所有形態の2軸で捉え4セルに分類し、それらのコミュニケーション効果について明らかにした。さらに、その論拠となる理論について詳細なレビューも行っている。出版後には、学会からの招待講演もあった。</p> <p>&lt;学術論文&gt;</p> <p>「メディアとしてのアートプレイス— 芸術支援のパブリック・リレーションズにおける役割 —」，共著，2023年3月，『マーケティングジャーナル』， Vol. 42, No. 4, pp27-38, 【招待論文，査読付き論文】</p> <p>上の図書で行った先行研究レビューをもとに、理論的な背景からこのフレームを再度導き出し、さらに空間メディアの特性を明らかにした論文を出版した。要旨は以下のとおり。</p> <p>日本では長年にわたって企業が芸術支援をしている。近年では資金提供だけでなく、アートプレイス（アートが存在する場所）を企業自らが運営し、関係者のコミュニティを支える事例が注目されている。そこでは、アートプレイスを通じて、企業はステークホルダーとの関係を深め、企業への好意的な態度を獲得している。そこで、本稿の目的は、アートプレイスのメディアとしての役割をパブリック・リレーションズの視座から示すこととする。最初に企業の芸術支援に関する学際的な研究群を整理した。そのうえで、それぞれのコミュニケーション上の特徴を期間、到達範囲と深さ、コンテンツの編集権に関して提示した。これにより、企業が多様なステークホルダーとの関係構築を目指すための手がかりが得られただけでなく、芸術組織にとっても、資金提供者との交流の場を共有する意義が示された。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2021年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	メディアとしてのアートプレイス — 芸術支援のパブリック・リレーションズにおける役割 —	書名	アートプレイスとパブリック・リレーションズ——芸術支援から何を得るのか
雑誌名	マーケティングジャーナル	論文名	
巻号	42(4)	出版社	有斐閣
発行年月	2023年3月	出版年月	2022年11月
ページ	pp.27-38(分担率70%)	ページ	270p(分担率60%)
著者名	川北眞紀子 藺部靖史	著者名	川北眞紀子 藺部靖史
備考	済	備考	済
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2022年度  
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年4月12日

氏名	窪田 祐一	所属	経営学部
研究課題	経営戦略の策定・実行のための管理会計システムの役割		
研究の種類	個人	グループ	
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究の目的は、イノベーション創発などの経営戦略の策定・実行を支える管理会計システムの役割を解明することにあった。研究を進めるなかで、特に、アントレプレナーシップとマネジメント・コントロール・システムの関係性に焦点を絞ることになった。</p> <p>まず、調査では回収済みであった Web 調査「両利きの経営とアントレプレナーシップに関する組織デザインについての調査」のデータについての統計分析を進めた。この Web 調査は、ビジネスユニットの責任者を対象に実施したものである。分析の結果、Levers of control の組み合わせ(マネジメント・コントロールのパッケージ)ならびにアントレプレナーシップ行動の変数を確認したところ、組織規模による相違がみられた。これらの分析結果については、論文として公表できるよう引き続き準備を進めている。</p> <p>上記の分析に加えて、アントレプレナーシップとマネジメント・コントロール・システム(MCS)の関係についての文献調査を進め、今後の研究の方向性を模索した。文献レビューは、企業成長モデル、企業家的志向、コントロール・パッケージの3つの視点で先行研究の知見を整理し、さらに企業家的ギャップの研究、エフェクチュエーションの研究の成果をマネジメント・コントロールの視点で考察を加えた。これらの成果は『南山経営研究』に論文として取り纏めた。</p> <p>文献調査の結果としては、急成長するスタートアップ企業の MCS の採用・設計・利用ステージ、ラディカル・イノベーションを生み出すコーポレート・アントレプレナーシップと MCS の関係性、ダイナミック・テンションとアントレプレナーシップの関係性、アントレプレナーシップに適したコントロール・パッケージなどの解明が将来の研究課題として求められていることが明らかになった。また、企業家的ギャップは戦略的变化にとって中核的なメカニズムであるが、アメーバ経営を対象とした研究が役に立つ可能性が高いことや、エフェクチュエーションの論理が MCS にとって新たな視座を与えることを示唆した。</p>			



## 研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パッセ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	アントレプレナーシップとマネジメント・コントロール・システム	書 名	
雑誌名	南山経営研究	論 文 名	
巻 号	第37巻第3号	出 版 社	
発行年月	2023年3月	出版年月	
ペ ー ジ	261-281	ペ ー ジ	
著 者 名	窪田 祐一	著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・ <u>予定あり</u> ・予定なし		
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出版年月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出版年月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
 パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2023年 4月13日

氏名	竹澤 直哉	所属	経営学部
研究課題	アナリスト予測によるセンチメントと株価分布の関係に関する考察		
研究の種類	(個人)	グループ	
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p><b>研究経過</b></p> <p>株式収益率と過去の財務データ・アナリスト予測 (センチメントの proxy)、株式市場エントロピーとの関係性を調べるため、PACAP データベースの月次データやアナリスト予測データ、企業財務データ (PBR) を収集・整理したのち、株価収益率に対する市場のセンチメント (株価予測データから推定)、市場リターンのエントロピー、PBR (Price to Book Ratio) のエクスポージャーを回帰分析で推定した。分類器による分析は明確な結果が出なかったため、セクターによるクロスセクション分析を行うことで各ファクターの影響を測定した。この分析結果は、南山経営研究の 37 巻 3 号 “The Stock Return Exposure to Market Sentiment, Market Return Entropy and Price to Book Ratios in the Japanese Equity Market” という論文でまとめた。</p> <p><b>研究結果</b></p> <p>本研究は、市場のセンチメントを測定するためにアナリスト予測や市場リターンのエントロピーをファクターとして使用している点で独自性があるだけでなく、従来の PBR (price to book ratio、将来の成長性指標) といった財務データも用いている。これらのファクターに対するエクスポージャーは業種ポートフォリオや個別株式の収益率に対して推定した結果、Agriculture, Fishery and Mining, Manufacturing and Financial and Insurance といったセクターに対するエクスポージャーが強かった。個別の株式に対して推定された係数をセクターダミーに対してクロスセクション分析した結果、市場センチメントファクターに対して、これらセクターが正の影響を持ち、そしてエントロピーファクターに対しては負の影響があることがわかった。この結果から、市場のセンチメントがこうした業種に対して影響を受けやすいことがわかった。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2022 年度南山大学バツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	The Stock Return Exposure to Market Sentiment, Market Return Entropy and Price to Book Ratios in the Japanese Equity Market	書名	
雑誌名	南山経営研究	論文名	
巻号	37巻 3号	出版社	
発行年月	2023年3月	出版年月	
ページ	337-352	ページ	
著者名	Naoya Takezawa	著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI	紙媒体		
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年 3月31日

氏名	松井 宗也	所属	経営学部
研究課題	無限分解可能分布の密度関数の subexponentiality に関して		
研究の種類	個人		
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>無限分解可能分布の裾確率 (大きな値をとる確率) を特徴づける、subexponentiality という性質を研究した。具体的には、実数上に値をとる無限分解可能分布の密度関数の裾 (テイル) が subexponentiality を持つための条件を導き出した。分布が非負の値をとる場合には、条件は既に知られている。密度関数の subexponentiality というのは、<math>n</math> 個 (<math>n</math> は自然数) の密度関数の畳み込みで新しくできた密度関数の裾が、漸近的にもとの密度関数の裾を <math>n</math> 倍したものになっているという性質である。Subexponentiality は裾の重い分布を特徴づける性質のひとつとして知られており、様々な応用がある。</p> <p>以下ではより詳しく研究成果を説明する。まず、無限分解可能分布という確率分布のクラスは、多くの場合に分布関数や確率密度関数が解析的に表現できず、その定義は専ら特性関数によって特徴づけられる。その特性関数はレヴィ・ヒンチン表現という形式で特徴づけられ、本研究ではそこに現れるレヴィ測度という測度が重要な役割を果たす。分布関数や密度関数の性質の多くもこのレヴィ測度から導かれる。</p> <p>Subexponentiality という性質に関しても、レヴィ測度からの特徴づけが可能であることが知られている。実際、確率変数が非負の値をとる場合や、自己分解可能分布のクラスに関しては、分布の密度関数の subexponentiality とレヴィ測度が subexponentiality を持つことが同値となることが示されている。しかし、一般の実数に値を取る場合は、こういった特徴づけはまだ得られておらず、そのためには何らかの追加的な条件が必要なことが予想されていた。</p> <p>本研究では、単調性を拡張した eventually non-increasing (e. n. i.) という性質と asymptotic to non-increasing (a. n. i と略) という性質を、無限分解可能分布の密度関数や、レヴィ測度の密度関数 (レヴィ密度) に仮定した。そしてこの条件のもとで、密度関数とレヴィ測度の subexponentiality に関する同値性を導いた。確率変数が非負の場合と異なり、これらの条件が無いと例外が作れることも示した。</p> <p>なお、研究成果は国際雑誌に掲載されたが、文言を入れ忘れたので他の研究成果を報告する。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2022 年度南山大学パツヘ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Tails of bivariate stochastic recurrence equation with triangular matrices	書名	
雑誌名	Stochastic Processes and their Applications	論文名	
巻号	150	出版社	
発行年月	August 2022	出版年月	
ページ	147-191	ページ	
著者名	Ewa Damek and Muneya Matsui	著者名	
備考	済	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI	<a href="https://doi.org/10.1016/j.spa.2022.04.008">https://doi.org/10.1016/j.spa.2022.04.008</a>		
オープンアクセス	済		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2023年 4 月 5 日

氏 名	王 冷然	所 属	法学部法律学科
研 究 課 題	投資取引に関する法規制および被害救済の状況		
研 究 の 種 類	個人		
共 同 研 究 者			
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究は、金融商品取引法、商品先物取引法および金融サービスの提供に関する法律の規定を中心に投資取引に関する法規制の変遷を整理したうえで、被害救済に関する裁判上の救済状況と裁判外の救済状況を確認し、浮き彫りになった課題を解明することを目的とする。</p> <p>金融事業者の投資勧誘や業務行為に関する重要な行為規制は、1990年代以降に制定されたものが多く、その中に最も重要な行為規制である適合性原則に関しては、金商法と商先法の条文上、顧客の属性の考慮要素は「知識、経験、財産の状況、投資目的」の4つしか挙げられていない。しかし、裁判実務において、適合性原則違反の有無を判断するにあたって、顧客の属性について、業法上の4つ考慮要素のほかに、顧客の年齢や経歴、理解力等の要素も考慮されており、私法上の判断は必ずしも業法の規定に限定されていない。もう一つ重要な行為規制である説明義務に関しては、金融サービス法上の説明義務の範囲は、金商法などの業法上のそれより広いが、金融サービス法上の説明義務はまだ金融商品の内容の一部および金融商品の抽象的リスクを対象にとしており、金融商品の価値の判断にとって重要な情報や発行者の具体的信用リスクの説明を対象にしていないという問題が残されている。</p> <p>裁判実務においては、基本的に適合性原則違反と説明義務違反を中心に金融業者の損害賠償責任が認定されており、それぞれに関する最高裁判決が出されたが、いずれも否定判決であり、裁判実務に消極的な影響を与えおり、投資取引紛争における被害救済に関しては、裁判実務の判断は停滞しているように見える</p> <p>裁判外の ADR に関しては、あっせん事例の大半は不当勧誘に関するものであり、しかも適合性原則や説明義務、断定的判断の提供などに関するものが多いことから見ると、投資取引紛争に関する裁判法理、金融事業者の行為規制に関する法規定や法理論は和解の成立にある程度利用されていると推測することができる。</p> <p>最後に、投資取引紛争に関する裁判例について、過失相殺が安易に行われていると、1990年代から指摘され、現在も同様な問題が存在する。顧客側に過失があれば、過失相殺を行うことには問題がないが、「顧客の過失」をどのように認定するかが裁判実務にとっても理論研究にとっても大きな課題である。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2022 年度南山大学パッセ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	投資取引をめぐる法規制・被害救済の変遷と課題	書名	
雑誌名	現代消費者法	論文名	
巻号	57号	出版社	
発行年月	2022年12月	出版年月	
ページ	50～62頁	ページ	
著者名	王 冷然	著者名	
備考	済	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2024年 3月 17日

氏名	岡田悦典	所属	法学部法律学科
研究課題	アメリカ証拠法における偏見排除法理の研究		
研究の種類	個人		
共同研究者	なし		
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>アメリカ合衆国の偏見法理の誕生は、リビングストン(David Livingston)の19世紀初頭の法案に遡る、この内容について調査するとともに、同時期のもので、フィールド (David Dudley Field) のニューヨーク州の草案起草、スティーブン (Fitzjames Stephen) の法案を調査した。その後、関連性をめぐる議論においては、グリーンリーフ (Simon Greenleaf) とセイヤー (James B. Thayer) の言説が重要であり、その内容を調査した。これらの理論的・立法的営為から、徐々に、証拠の関連性 (relevancy) の中において、争点を混乱させる事実を裁判官が裁量的に排除する法理が明確になっていき、受け入れられるようになっていく過程を、19世紀から20世紀初頭にかけて、明らかにすることができた。</p> <p>その後、アメリカ合衆国では、法理が具体的な立法改革の中で現実的に作り上げられていった。この過程は、20世紀の初頭に始まり、アメリカ法曹協会 (American Law Institute) の模範法典の成立 (1940年代) の中に組み込まれて、さらに、1975年アメリカ連邦証拠規則の中に組み込まれていったという歴史を明らかにすることができた。また、連邦証拠規則 403条の成立によって、体系的にこの法理をまとめることに成功した Dolan(Andrew K. Dolan)の論文を詳細に研究した。アメリカ証拠法においては、法律的関連性という特別な枠組みではなく、関連性という枠組みで議論が定着し、裁判官の裁量によって証拠排斥することの意義、また、排斥するための手続的装置の在り方についても、その議論をまとめることができた。</p> <p>わが国では、20世紀中葉に現行刑事訴訟法が制定された段階で、関連性に関する研究が行われ、主に、江家義男、山崎清、平野龍一が、その先鞭を残した。しかし、偏見法理についての言及はなく、もっぱら性格証拠の理論を詳細に分析するものであって、その中で、被告人の「悪性格」について論じられているものがほとんどであった。また、証拠排除という結論を導くものはあるが、明瞭な形で、これを規律する理論的、手続的考察は、今後の課題として残されたままであった。</p> <p>わが国では、1950年代前後にアメリカ法の議論を受容したことが窺われる。近年では、わが国でも、証拠の関連性に関する議論・研究の深化が唱えられるようになった。アメリカ証拠法の歴史的過程を踏まえると、わが国の現状においてもその導入は望ましいと考えられる。そして、それは曖昧な判例法理ではなく立法化が望ましいと考えられる。</p>			



## 研究成果公刊（計画を含む）

「2022 年度南山大学パツヘ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	アメリカ証拠法における偏見排除法理の誕生と展開（予定）	書名	
雑誌名	南山法学（予定）	論文名	
巻号	未定	出版社	
発行年月	未定	出版年月	
ページ	未定	ページ	
著者名	岡田悦典	著者名	
備考	未（2025年3月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI	未定		
オープンアクセス	予定あり		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年 4月 15日

氏名	小原 将照	所属	法律学科
研究課題	アクティブラーニングによる法学教育とその効果		
研究の種類	個人	グループ	
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>「自ら主体的に学ぶ」というアクティブラーニングが大学教育において求められている環境の中で、その効果がどのような形で測定され、また検証されるべきかは、まだまだ手探りの状況が強い。そのような状況の中で、「PROG」の受験によって、個々のゼミ参加者の能力の測定（リテラシー&amp;コンピテンシー）は、1つの方向性が見えたように思える。</p> <p>問題は、そのベースとなる法学教育の内容をどのように構築するのか、という側面である。グループワークの形式を中心としているが、まだまだ確実に内容を固定できない状況にあり、専門領域での研究を深める中で、1つ1つ実施内容を検討していかなければならないと考えている。ただ、少なくとも個人単位での学修は、グループ単位での学修よりも、成長度が低くなりやすく、また成長できない学生が多くなる傾向にある、という点は実感している。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2023年 3月20日

氏名	緒方 桂子	所属	法学部
研究課題	ライフ・コース視点から考える持続可能な社会のための労働立法政策		
研究の種類	個人	グループ	
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b>（研究経過、研究結果を800～1,000字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究は、ライフ・コース視点から、持続可能な社会のための労働立法政策のあり方を考えるという大きな構想のもとにあるが、2022年度は、①労働者の在宅勤務権に関するドイツとの比較法研究とそれを踏まえた日本への示唆、及び、②労働者に対する配転命令とそれに対する法的規制のあり方という2つの課題を設定した。</p> <p>このうち、②については、配転命令に関するリーディングケースである東亜ペイント事件最高裁判決昭和61年7月14日労判477号6頁にいう「通常甘受すべき程度を著しく超える不利益」とは具体的に何なのかという問題について取り組み、その成果を公刊した。</p> <p>また、①については、ドイツ法の動きがまだ確定的でないことから、研究を継続している状況である。</p> <p>他方、申請の段階では明確に提示していなかったが、本研究の問題意識をベースに、いくつかのテーマで研究を展開した。</p> <p>まず、日本労働法学会第139回大会（2022年10月29～30日、法政大学）において「多様化するライフ・コースにおける労働と公正性の保障について考える」というテーマでワークショップを企画した。そして、そのなかで、「ドイツにおける架橋的パートタイム労働制度について」と題する報告を行った。その成果は、2023年5月刊行予定の『日本労働法学会誌 第136号』（2023年5月公刊予定）に掲載される。もっともこの成果についてはワークショップを共同して行った橋本陽子教授（学習院大学）、浅倉むつ子教授（早稲田大学名誉教授）との共著という形になるため、研究成果公刊物としては掲載していない。同テーマでの研究を継続し、次年度以降、単著での研究成果の公刊を目指している。</p> <p>次に、持続可能な社会という観点から労働組合の役割に着目し、労働組合との団体交渉の場における使用者の誠実交渉義務を理論的に考察した。そのなかで、誠実交渉義務が、憲法の基礎にある人間の尊厳の実現のために重要な役割を担うことを明らかにした。</p> <p>また、持続可能な社会における立法政策として、職場のハラスメントに対する立法政策も重要な関心事である。この点については、韓国の法制度との比較を通じて、多角的に検討を行うことが必要と考え、「職場のハラスメントに対する規制と救済」というテーマで日韓比較法フォーラムを企画するとともに、法制度の違いとその意味について明らかにした同フォーラムの解題という形で成果をまとめ、また関連条文を翻訳し公刊した。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パツヘ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	職場のハラスメントに対する規制と救済－日韓の比較法的検討・解題	書名	社会法をとりまく環境の変化と課題
雑誌名	労働法律旬報	論文名	東亜ペイント事件最高裁判決再考－「通常甘受すべき程度を著しく超える不利益」と家族
巻号	2022号	出版社	旬報社
発行年月	2022年12月	出版年月	2023年3月27日
ページ	6～15頁	ページ	
著者名	緒方 桂子	著者名	緒方 桂子
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（2023年 4月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目	誠実交渉義務に関する理論的一考察	書名	
雑誌名	季刊労働法	論文名	
巻号	280号	出版社	
発行年月	2023年3月	出版年月	
ページ	74～85頁	ページ	
著者名	緒方 桂子	著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年1月31日

氏名	榊原秀訓	所属	法学部
研究課題	ジョンソン政権下における公法改革		
研究の種類	個人	グループ	
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b>（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>申請書で書いたイギリスのジョンソン政権下における 1998 年人権法（Human Rights Act）改革については、トラス首相の下で人権法改革がストップしたが、その後のスナク首相の下で法案審議が再開したところである。したがって、当初の予定よりもかなり時間的に作業が遅れ、本研究による検討も遅れている。そのため今後の検討となる部分が少なくないが、イギリス憲法研究者との間で、研究計画を立て、2023 年に成果を公表する予定である。現時点では、これにかかわっては、南山叢書に所収の比較的短い「委任立法」に関する紹介を公表予定にとどまっている。これは、南山叢書の原稿提出後に、イギリスにおける議論状況も踏まえて加筆修正を行ったものである。また、委任立法にかかわっては、イギリスを対象としたものではないが、日本における委任立法を争う訴訟として、生活保護基準切下げ訴訟が全国各地で展開されており、既に 13 地裁で判決が出ている。その中で、認容判決が 4 判決あり、その中の東京地判と大阪地判について、特徴的な判決である熊本地判と比較しつつ、検討を行い、令和 5 年重要判例解説として公表予定になっている（ただし、日本法を対象としたものなので、本研究の研究成果としてはあげていない）。さらに、生活保護基準切下げ訴訟については、別のところで、まとまった論文として公表を予定している。</p> <p>次に、ジョンソン政権下において実現した司法審査制度改革については、2022 年 3 月 16 日に開催したセミナーにかかわって、マンチェスター大学のロバート・トーマス教授に依頼した、「司法審査改革、<i>Cart</i> 司法審査および救済方法」（“Judicial Review Reform, <i>Cart</i> Judicial Review and Remedies”）の報告に関して、第三者委員会の報告書とともに検討し、報告の内容を院生に翻訳してもらったと同時に、このセミナーに関する紹介を南山法学に紹介し、2023 年 2 月に公表予定である（ただし、短文のセミナー紹介なので、本研究の研究成果としてはあげていない）。制度改革が行われたばかりであるので、具体的な成果の影響の本格的な分析は今後行う。</p> <p>上記に述べたように、イギリスにおける制度改革の遅れもあり、研究に関する意見交換や資料の収集はある程度終了したものの、それを検討する途中にとどまっている論点が少なくない。本研究の周延的なテーマを含め、一定の長さの研究成果の公表は、今後、南山法学やその他の媒体でしていきたいと考えている。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パツヘ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	「イギリスにおける自動化された行政決定の司法審査」（仮）	書名	行政裁量と行政的正義
雑誌名	南山法学	論文名	第8章補「委任立法の司法審査」
巻号	45巻3=4合併号	出版社	日本評論社
発行年月	2023年5月頃予定	出版年月	2023年3月予定
ページ	未定	ページ	244頁～247頁
著者名	榊原秀訓	著者名	榊原秀訓
備考	済・兎（2023年5月頃予定）	備考	済・兎（2023年3月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・ <input type="checkbox"/> 予定あり・ <input type="checkbox"/> 予定なし		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・ <input type="checkbox"/> 予定あり・ <input type="checkbox"/> 予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・ <input type="checkbox"/> 予定あり・ <input type="checkbox"/> 予定なし		

2022年度  
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年 4月 6日

氏名	田中 実	所属	法学部法律学科
研究課題	古代ローマの法や経済分野の専門用語に関する人文主義法学の貢献の研究		
研究の種類	個人	グループ	
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b>（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>年間を通じ、一般の辞書では、商人、卸業者、貿易商人、<b>One who engages in commerce, a wholesale trader or dealer</b> といった訳語があげられる <b>negotiator</b> について、古代ローマの共和政末期から帝政初期の用例を丹念に調べた、ドイツ人のエルネスティによる『文献学及び正文批判小品集』（1764 年）所収の「ローマの <b>negitiores</b> について」（<b>De Negotiatoribus Romanis</b>）、彼以前のイタリア人の人文主義者シゴニオ、およびフランス人の人文主義法学者オトマンの作品を調査・収集・講読し、同時に、彼らが引用・援用する法文、キケロの弁論や書簡を中心とした古典文献の箇所を逐一網羅的に検討した。</p> <p>そして、<b>mercator</b> とは異なり、<b>negitoator</b> は、属州に本拠を持つ金融業又は穀物取引に携わる商人との限定的な意味であったとのエルネスティの結論、及び。その後の概念の弛緩と国制との関係を結びつける彼の歴史叙述の意義を明らかにした。</p> <p>また研究の副産物として、その後の数々の法律用語辞典、一般のラテン語辞典、古典に関する事典類における <b>negotiator</b> 項目の説明を確認し、さらに、碑文資料をもちいた現代ローマ商法学の成果の一部とも比較した。</p> <p>2022 年 8 月、すでにほぼ制約がなくなっていたスイスにおいて、学会に参加し、二つの大学の研究機関を利用することができ、国内においては継続的にローマ相続法研究会に参加し、史料の読解につき貴重な意見交換や、重要な文献を利用も可能となった。また、研究の途上で、人文主義から実証主義法学、現代の英伊の歴史学者に関する本格的な研究書の書評を引き受けることとなり、その準備の過程で、研究対象である上記三人の学者につき、広い視座で位置づけることもできた。</p> <p>以上のような研究経過を辿り、2023 年 3 月 13 日京都大学で開催された日本ローマ法学会で、「<b>Negotiator</b> をめぐるヨハン・アウグスト・エルネスティ」と題して報告を行い、貴重な質問やコメントを得て、論説「<b>Negotiator</b> をめぐるヨハン・アウグスト・エルネスティ（1707-1781）」を執筆し投稿した（『南山法学』46 卷 3/4 号（2023 年）。最終稿提出済。添付は初校原稿）。</p>			



## 研究成果公刊（計画を含む）

「2022 年度南山大学パツヘ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Negotiator をめぐるヨハン・アウグスト・エルネスティ (1707-1781)	書名	
雑誌名	南山法学	論文名	
巻号	46巻3/4合併号	出版社	
発行年月	2023年	出版年月	
ページ	401頁～473頁（73頁）初校提出	ページ	
著者名	田中 実	著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・ <input type="checkbox"/> 予定あり・ <input type="checkbox"/> 予定なし		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・ <input type="checkbox"/> 予定あり・ <input type="checkbox"/> 予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・ <input type="checkbox"/> 予定あり・ <input type="checkbox"/> 予定なし		

2022 年度  
 パツへ研究奨励金 I - A - 2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2023 年 1 月 23 日

氏 名	レジナルド・アルヴァ	所 属	法学部
研 究 課 題	The Application of the Message of the Parable of the Good Samaritan in the Contemporary Times		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>Jesus' parable of the Good Samaritan is well-known not only by Christians but also by people who belong to other religious traditions or who have no affiliation to any religion or faith. The primary reason for the popularity of this parable is because of its core message of love, which has a universal appeal. In the contemporary times, the message of this parable has become even more relevant because the pandemic COVID-19 has caused havoc in the lives of millions of people and there is a great need to reach out to the weak and the vulnerable. In this paper I examined the application of this parable's teachings in the contemporary times to encourage people to serve the needy amid the pandemic. Pope Francis refers to this parable in his encyclical <i>Fratelli Tutti</i> to teach the importance of caring for others, who may belong to different cultures or religions.</p> <p>Pope Francis noted Christians need to act as the Samaritan, who could overcome all cultural barriers to help the wounded man. In the contemporary world, the pandemic has caused distress in the lives of many people. Christians too are affected by the pandemic. They too face the same difficulties as others. However, the message of the parable of the Good Samaritan encourages them, not to lose hope but to do their best for helping others.</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2016年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	The Application of the Message of the Parable of the Good Samaritan in the Contemporary Times	書名	
雑誌名	Urbana University Journal	論文名	
巻号	75 no. 3	出版社	
発行年月	2022	出版年月	
ページ	137-152	ページ	
著者名	Reginald Alva	著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2022年度  
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年 4月 6日

氏名	大原 寛史	所属	法学部法律学科
研究課題	契約法の改正と履行不能の判断構造		
研究の種類	<input checked="" type="checkbox"/> 個人	<input type="checkbox"/> グループ	
共同研究者	なし		
<p><b>研究実績の概要</b>（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>民法（債権関係）改正により、債権の効力および債務者の責任に関連する規定のいくつかは「契約その他債務の発生原因及び取引上の社会通念に照らして」という文言が採用されている。本研究は、そのうちの 1 つである履行不能の場面に焦点をあて、その判断における当該文言の解釈への影響について、先に改正を果たし議論の蓄積のあるドイツ法を参照し検討することにより、改正後の理論および実務に寄与しようとするものである。</p> <p>日本においては、現在、当該文言の解釈指針を示すべく議論がされている。もともと、当該文言を採用する規定が複数あることも影響し、やや一般的かつ抽象的な議論にとどまっている。他方で、日本に先んじて改正を果たしたドイツや国際的な統一ルール（例えば、CISG、PECL、DCFR など）の動向をみると、日本と同様に債権の発生原因などを含めた関係性に着目し、一般化を図る方向性を選択しつつも、個別の場面における具体的処理についても検討が進められている。とりわけドイツにおいては、改正後も、国際的な統一ルールの動向も踏まえつつ、国内法であるドイツ民法の規定の解釈が精緻に進められている。本研究が対象とする履行不能についても、ドイツはその考慮要素および判断基準を明文で規定しており、個別事例における解釈も集積している。</p> <p>本研究奨励金よる文献調査の結果、ドイツにおける具体的考慮要素のうち「給付の不均衡性」と「債務者の帰責性」について、それらの契約との関係性をめぐる議論をある程度網羅的に確認することができた。しかしながら、2022 年はドイツ債務法現代化より 20 年の節目であることを受け、これらのテーマについて改めて議論がされるに至っていること、本研究に関連する売買法の規定が 2021 年に改正され、2022 年に施行されたこと、その改正に関する議論を反映すべくドイツおよび日本において定評のあるコンメンタールなどの改訂が 2023 年に予定されていることなどから、本研究の成果はこれらの議論を含めた再検討のうえで論文として公表することが望ましい。したがって、申請時点における公表時期を変更した。引き続き、本研究を継続し、2024 年 4 月公刊を目指す。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	未定	書名	
雑誌名	南山法学	論文名	
巻号	47巻3=4合併号	出版社	
発行年月	2024年4月末（予定）	出版年月	
ページ	未定（30～50頁程度を予定）	ページ	
著者名	大原 寛史	著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年 4月 12日

氏名	橋本 広大	所属	法学部
研究課題	FATF (金融活動作業部会) 相互審査の研究：刑事法的観点から		
研究の種類	<input type="checkbox"/> 個人	<input type="checkbox"/> グループ	
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究は、FATF (Financial Action Task Force:金融活動作業部会) が各国のマネー・ローンダリング対策の履行状況を評価する審査 (以下、「FATF 相互審査」) について、刑事法的観点から検討を行い、2021年8月末に公表された日本についての FATF 第四次相互審査報告書 (以下、「FATF 第四次対日相互審査報告書」) を受けてどのように対応すべきかを明らかにすることを目的として行われた。そのために、まず、&lt;課題1&gt;FATF 相互審査の概要や法的性質を整理し、&lt;課題2&gt;特に刑事法的に重要である部分を抽出したうえで、&lt;課題3&gt;FATF 第四次対日審査報告書の検討を行った。</p> <p>もともと、本研究に係る申請書提出時 (2022年4月) 以降、FATF 第四次対日相互審査報告書を受けた対応として、特に、マネー・ローンダリングの処罰をめぐって法改正を含む大きな動きがあった。そのため、研究成果としてはその点に特に焦点を当てた形での論文 (次頁研究成果) として公表することとした。</p> <p>同論文では、上記課題1および2について踏まえた上で、課題3については、特にマネー・ローンダリングの処罰に関連する部分に検討を加えた。続いて、日本におけるマネー・ローンダリング罪について概観した上で、同罪の法定刑を引き上げるべきとする FATF の指摘を受けて行われた、法制審議会刑事法 (マネー・ローンダリング罪の法定刑関係) 部会での議論を検討した。さらに、同部会の議論・答申を経て実現した、組織的犯罪処罰法の改正法 (2022年12月9日公布、2023年2月20日施行) によるマネー・ローンダリング罪の法定刑引き上げの意義について検討した。そこでは、組織的犯罪処罰法制定時 (1999年) にはみられなかった、暗号資産や電子マネーをはじめとする多様な形態の犯罪収益が現在ではみられること、それにともなって、犯罪収益を隠匿等するマネー・ローンダリングの手法も巧妙化していること、それにより犯罪組織が犯罪収益を保持しやすくなっていること等をふまえば、単に FATF から指摘されたからという理由のみならず、このような国内的事情にかんがみても同罪の法定刑引き上げは支持されうるし、同罪による訴追をより積極的に行うインセンティブを訴追当局に与えるものであると指摘した。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	FATF 第四次対日相互審査とマネー・ローンダリングの処罰	書名	
雑誌名	南山法学	論文名	
巻号	46巻3=4号	出版社	
発行年月	2023年4月予定	出版年月	
ページ	pp. 41~72 (32頁)	ページ	
著者名	橋本 広大	著者名	
備考	済・未 (2023年 4月頃予定)	備考	済・未 ( 年 月頃予定)
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未 ( 年 月頃予定)	備考	済・未 ( 年 月頃予定)
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未 ( 年 月頃予定)	備考	済・未 ( 年 月頃予定)
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・特別)研究成果報告書

2023年4月12日

氏名	O'CONNELL, SEAN	所属	総合政策学部総合政策学科
研究課題	<b>Current Design, Implementation and Evaluation Methods of Service-Learning Programs in Japan</b>		
研究の種類	個人	グループ	
共同研究者	—		
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>2022 年度には、パツへ研究奨励金を用いて、日本における国際サービス・ラーニングのカリキュラムデザイン・実施及び評価方法について研究することができた。コロナ禍による制約緩和により、計画通りに現地調査及び資料収集活動を行い、最終的に次のような研究出張を通じて、現在取組中の科研プロジェクトに大いに役立った。</p> <p><b>研究出張</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 愛媛大学 2回</li> <li>2) 上智大学短期学部 1回</li> <li>3) 香川大学 1回</li> <li>4) 国際基督大学 1回</li> </ol> <p>研究出張については、上述の大学先で実施しているプログラムのデザイン・実施及び評価方法に関連するデータを収集した。各訪問大学のプログラムの狙いと学習効果の設定について、資料収集を数多く分析すると同時に、学生による授業評価や実施側の主観的な評価を比較することによって、科研研究において参考になるものが多かった。</p> <p>これらの出張で収集できたデータは当パツへ研究とそれに関連する現在実取組中の科研研究に大いに役立っている。従って、関連執筆 (2023 年度 6 月発行予定の 1 編) を別紙の通り、報告する。</p>			



## 研究成果公刊（計画を含む）

「2022 年度南山大学パッセ研究奨励金 I-A-1」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書名	アカデミア人文・自然科学編第 26 号
雑誌名		論文名	<i>An Investigation of Current Design, Implementation and Evaluation Methods of Service-Learning Programs in Japan</i>
巻号		出版社	南山大学
発行年月		出版年月	2023 年 6 月
ページ		ページ	計 14 ページ
著者名		著者名	OCONNELL Sean
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（2022 年 6 月頃予定）
DOI			教育企画・研究推進課に原稿提出済み（今現在初校を待っているところです）
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年1月31日

氏名	山田哲也	所属	総合政策学部
研究課題	19世紀における大国間協調を通じた国際平和構想と機能的国際協力の相互作用		
研究の種類	個人	グループ	
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>2022 年度に採択された、同じテーマの科研費基盤研究 (C) による配分額を補うものとして、本奨励金では図書および文献複写、消耗品を購入した。</p> <p>主として、機能的国際協力の中でも国際河川と国際郵便制度の発展史に重点を置いたほか、日本の近代化 (植民地帝国化) に伴う国際機構への参加にも注目し、それぞれ文献 (書籍・論文) を入手した。</p> <p>研究業績としては、別記した雑誌論文の他に、日本国際政治学会 2022 年度研究大会の国際政治経済分科会において「国際河川委員会の経験とグローバル・ガバナンス」と題する研究報告を行った。これについては、同学会 2023 年度研究大会においても、公募企画として部会を開催することとし、国際河川制度についてより幅広い視点からの研究報告を実施する予定である。また、国際郵便制度については、2023 年 8 月締め切りの『境界研究』誌に査読論文を提出する予定である。</p> <p>なお、科研費基盤研究 (C) は 2026 年度まで継続するので、引き続き同テーマについて研究を実施する。2022 年度の成果を踏まえ、2023 年度においては、国際連盟の形成史から戦間期の動きを中心に研究を実施する予定である。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パツヘ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	国際河川制度の起源と展開	書名	
雑誌名	アカデミア（社会科学篇）	論文名	
巻号	2023年6月刊行分	出版社	
発行年月	2023年6月刊行分	出版年月	
ページ	未定	ページ	
著者名	山田哲也	著者名	
備考	済・未（2023年6月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年 3月 31日

<b>氏名</b>	山田 望	<b>所属</b>	総合政策学部総合政策学科
<b>研究課題</b>	ペラギウス派神学の文献・考古史料に基づく相互影響史的観点による教会政治史的研究		
<b>研究の種類</b>	○個人                                  グループ		
<b>共同研究者</b>			
<b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)			
<p>本研究は、西方教会最大の異端とみなされてきた5世紀のペラギウス派が、実は異端などではなく、単に東方神学の神学的特徴やアスケシスの救貧実践をローマの地に根付かせようと試みていただけであり、東方神学の思想的枠組みや禁欲的实践からすれば異端などではなかったとの仮説を、相互影響・発達史的観点というこれまでになかった新しい研究方法によって解明しようと試みる研究である。ペラギウス派が異端ではなかったとなれば、彼らを異端として排斥したアウグスティヌスははじめ北アフリカ司教団はなぜ、どのような理由、方法で彼らを異端として排斥したかが問題となり、この点について、伝承史的・教会政治史的方法論を駆使して解明した。さらに、ペラギウス派が東方神学の影響の中でも、アンティオケイア伝承から多大な影響を受けていたことは明らかでありながら、アンティオケイア伝承とはことなる伝承、とりわけカッパドキア伝承の中でもバシレイオスからの影響を受けており、また、さらに異なるアンティオケイア伝承の中でもオリゲネスからの影響も受けていたことが確認できた。このように、複数の異なる伝承からペラギウス派が影響を受けていた理由について、相互影響・発達史的研究方法によって解明した。</p> <p>以上の研究について、報告者は現在、この分野で世界最高レベルの研究環境を保持するバチカン・アウグスティニアヌム教父学研究所にて、研究休暇を利用して在外研究を行っており、とりわけ、当該研究所の Prof. Dr. Angelo Segneri (セニェーリ) 教授をはじめとした世界最高水準の教授陣たちとも学術的交流を深めながら、本研究所の図書館等の施設を十分に利用することによって論文を執筆し、2023年に刊行予定のアカデミアに投稿し、予定通り出版されることとが決まっている。2023年8月に英国Oxford大学で開催される予定であった国際教父学会は、コロナの影響により1年延期され、2024年8月に開催されることとなったので、本研究成果は、来年の本学会をはじめ複数の国際学会にて発表の予定である。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2022 年度南山大学パッセ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	ペラギウス論争への相互影響・発達史的研究方法の適用妥当性 - ドナトゥス派論争との関係考察における史的・方法論的課題を中心に -	書 名	
雑誌名	南山大学紀要『アカデミア』人文・自然科学編	論 文 名	
巻 号	第 26 号	出 版 社	
発行年月	2023 年 6 月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	1- 24	ペ ー ジ	
著 者 名	山 田 望	著 者 名	
備 考	済・○未（2023 年 6 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・○予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2022年 4月 14日

<b>氏名</b>	梁 暁虹	<b>所属</b>	総合政策学部総合政策学科
<b>研究課題</b>	無窮会本系『大般若経音義』における特徴の研究-多音節語を例として		
<b>研究の種類</b>	個人		
<b>共同研究者</b>			
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究は、私がこの十数年来研究してきた「日本仏経音義と漢字研究」の一部であり、特に 2019 年度認可された科研費項目である「日本中世における異体字の研究-無窮会系本『大般若経音義』三種を中心として」と関連がある。その概要を以下に記す。</p> <p>1. 研究経過：</p> <p>①資料調査</p> <p>新型コロナの影響で、予定していた今年度の仏経音義、古写本仏経、中世漢字資料、石碑文字についての海外資料収集は不可能であった。しかし、国内での資料収集は、以下に示す寺や博物館等にて行なった。即ち、和歌山県立博物館、長野県木曾郡大桑村にある定勝寺、宇治市黄檗山宝蔵院と黄檗山萬福寺などである。特に和歌山県立博物館にて「特別展:きのくにの大般若経-わざわいをはらう経典-」、黄檗山寶蔵院内の鉄眼版一切経版木収蔵庫、定勝寺蔵『大般若経音義』などからは、非常に貴重な資料を観覧、入手することができ、本研究には不可欠のものになった。</p> <p>②論文の執筆と著書の修正</p> <p>2022 年は、計七つの国際学術会議 (オンラインで) に参加、七篇の論文を書いた。7 篇は会議発表、2 篇は学術刊行物に投稿。既に発表されたものもあり、未公開のものもある。</p> <p>2022 年度、南山大学学術叢書として、『無窮会本系「大般若経音義」研究-以漢字研究为中心』を出版するため、修正および校正作業を行なった。2023 年 3 月上海教育出版社に出版された。(以下の「研究成果公刊」の一覧を参考)</p> <p>2、研究結果：</p> <p>① 学術会議参加及び研究発表 (計 7 回)：</p> <p>(1) 2022. 5. 28-29、台湾輔仁大学にて、オンライン開催、「第 33 回中国文字学国際学術研討会」に参加し、「“無窮會本系”三種『大般若経音義』“詹”声俗字考」という題の論文を発表した。</p> <p>(2) 2022. 10. 28-31、中国浙江工業大学にて、オンライン開催、「第二回漢語音義研究学術研討会」に参加し、「“無窮会本系”『大般若経音義』複音詞积文特色研究」という題の論文を発表した。</p> <p>② 論文公刊及び著書出版：</p> <p>(以下の「研究成果公刊」の一覧を参考)</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2022 年度南山大学パッセ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	無窮会本『大般若経音義』疑難異體字例考(下)	書名	『無窮会本系「大般若経音義」研究——以漢字研究為中心』
雑誌名	『東亜文献研究』	論文名	
巻号	三十巻	出版社	上海教育出版社
発行年月	2022年12月	出版年月	2023年3月
ページ	1-19	ページ	pp. 473
著者名	梁曉虹	著者名	梁曉虹
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目	「無窮会本系」『大般若経音義』訛字研究	書名	
雑誌名	『北斗語言学』	論文名	
巻号	第十巻	出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名	梁曉虹	著者名	
備考	済・未（ 2023 年 5月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年 2 月 7 日

氏 名	太田和彦	所 属	総合政策学部
研究課題	超学際的連携に関するゲームベースの学習：図書館でのシリアスボードゲームジャム		
<p><b>研究実績の概要</b>（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>イベント「図書館でシリアスボードゲームジャム 2022」（SBGJ2022）は、2022 年 9 月にくまもと森都心プラザで開催された。同イベントの参加者への学術情報提供のプロセスにおいて、下記の 2 つの成果物を執筆・編集した。</p> <p>本研究の成果物①として、太田和彦・竹中真也・齋藤宜之編集, 2023, 『環境倫理』 No.4, 中央大学理工学部 寺本剛研究室 を刊行した。同論文集に収められた、本研究実績の概要は以下のとおりである：</p> <p>『環境倫理』 No.4 は、2 つの特集と研究ノート、書評で構成されている。特集 1 では、フードシステムの持続可能性と再生可能性を向上させるための理論と実践をまとめた教科書的な論文集 Duncan, J., Carolan, M. S., &amp; Wiskerke, J. S. (Eds.). (2021). Routledge handbook of sustainable and regenerative food systems . London, UK: Routledge. から、代表的な論文を紹介した。若手・中堅研究者有志を中心に、各自の関心に近い章を選び、その概要のみならず、議論の背景から意義までを解説した。国際的な研究動向の概要を、参加者に紹介するにとどまらず、日本語で気軽に読むことができる媒体を作ることができた。</p> <p>本研究の成果物②として、大谷通高・太田和彦, 2023, 研究機関における広報誌の機能—『地球研ニュース』の分析から—, 『アカデミア社会科学編』 第 24 号, 南山大学 を刊行した。同論文に収められた、本研究実績の概要は以下のとおりである：</p> <p>本論は、総合地球環境学研究所（以下、地球研）の広報誌『地球研ニュース』を事例に、研究機関における広報誌の機能を考察している。本論では三島万理の企業広報誌研究を踏襲して、研究機関の「広報活動」と「広報誌」の定義づけを行い、そこから地球研の広報活動と広報誌の概説・来歴を辿り、研究機関の広報活動の特徴を、企業広報誌との比較から考察し、広報誌の特性についてプレスリリースとの比較から論じた。その結果、研究機関の広報活動の特徴として、①同業者である研究者コミュニティが宛先としてある点、②サイエンス・コミュニケーション的機能を備えている点が見いだされた。広報誌はプレスリリースと比して、表現方法の自由度が高く、受け手が思考のプロセスを重視した情報・批評・評論を受け取れ、時間をかけて、批判的に問題を考える起点となりうるため、サイエンス・コミュニケーションにおいて重要な媒体であると結論づけた。シリアスゲームイベントにおける、研究機関のニュースレターの有用性を位置付けた論文といえる。</p>			



## 研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	研究機関における広報誌の機能— 『地球研ニュース』の分析から—	書名	『環境倫理』vol. 4
雑誌名	アカデミア 社会科学編	論文名	
巻号	第24号	出版社	中央大学工学部 寺本剛研究室
発行年月	2023年2月	出版年月	2023年1月
ページ	131-138	ページ	全177頁
著者名	大谷通高・太田和彦	著者名	太田和彦・竹中真也・齋藤宜之編
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2022年度  
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2023年 4月 4日

氏名	沢田 篤史	所属	理工学部ソフトウェア工学科
研究課題	品質特性を考慮した IoT システムアーキテクチャの設計支援環境に関する研究		
研究の種類	個人	グループ	
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究の目的は、2020 年度から 2022 年度の研究期間で採択されていた科研費基盤(C)20K11759 の課題と連携しながら、IoT システムのための品質主導型ソフトウェアアーキテクチャの設計を支援する環境の実現方法を検討することである。</p> <p>2022 年度は前年度までに行ってきた品質特性とアーキテクチャ設計パターンとの対応関係の分析結果に基づくアーキテクチャ設計方法について、対象とする品質特性を拡大するとともに、関連するアーキテクチャスタイルを洗練しながら、その自動化支援の可能性について検討を行った。</p> <p>前年度までに取り上げた品質特性は、相互運用性、互換性、柔軟性、保守性、利用性、セキュリティ、信頼性などであったが、2022 年度においては、仮想現実感 (VR) や拡張現実感 (AR) を用いたアプリケーションを想定し、利用性と柔軟性を主な対象にしてこれまでの設計方法の見直しを行った。</p> <p>今年度における本研究の成果は、査読付き学術論文 1 編、学会発表 2 編として公刊済みである。</p> <p>「雑誌の部」の論文 1 は、電子通信情報学会知能ソフトウェア工学研究会にて発表した論文である。VR 環境における文字入力の利用性を高めるための方式と、その実装例を提案している。プロトタイプシステムを用いた実験の結果、提案する文字入力方式と利用性向上との間に柔軟性を持った切り替え論理が必要なことが分かった。このことから、アーキテクチャ設計とともにアプリケーション構築プロセスの整備の必要性について議論している。</p> <p>論文 2 は、日本ソフトウェア科学会第 39 回大会にて発表した論文である。論文 1 での議論に基づいて、VR 環境における様々な文字入力方法の中から、本研究で物理フリック入力と呼ぶ方法の利用性向上に向けた工夫について議論した。</p> <p>論文 3 は、日本ソフトウェア科学会ソフトウェア工学の基礎研究会にて発表した査読付き論文である。論文 1, 2 での議論と評価に基づいて、VR 環境における柔軟な入力方法の切り替えを実現するためのアーキテクチャ設計のあり方について議論した。</p> <p>これらの成果を通じ、利用性と柔軟性を中心としたアーキテクチャ設計との関係を整理するとともに自動化支援の可能性についての議論ができた。このことから、今年度に設定した研究目標はおおむね達成できたものと考えている。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
「2022 年度南山大学パッへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。			
①		①	
論文題目	VR 環境における文字入力方法に関する研究	書 名	
雑誌名	信学技報 (KBSE2022-2)	論 文 名	
巻 号	Vol. 122, No. 38	出 版 社	
発行年月	2022 年 5 月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	pp. 7-12	ペ ー ジ	
著 者 名	清原隆一, 長谷川舞, 加藤光琴, 沢田篤史, 野呂昌満	著 者 名	
備 考	済	備 考	済・未 ( 年 月頃予定)
DOI			
オープンアクセス	済		
②		②	
論文題目	VR 環境における文字入力のための 触感を伴ったフリック入力方法	書 名	
雑誌名	日本ソフトウェア科学会第 39 回大 会講演論文集	論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月	2022 年 8 月	出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名	清原隆一, 沢田篤史, 野呂昌満	著 者 名	
備 考	済	備 考	済・未 ( 年 月頃予定)
DOI			
オープンアクセス	済		
③		③	
論文題目	VR 環境における文字入力支援シ ステム	書 名	
雑誌名	ソフトウェア工学の基礎 29 (日本 ソフトウェア科学会ソフトウェア 工学の基礎研究会 FOSE2022)	論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月	2022 年 11 月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	pp. 61-66	ペ ー ジ	
著 者 名	清原隆一, 野呂昌満	著 者 名	

備 考 済	備 考 済・未 ( 年 月頃予定)
D01	
オープンア クセス	予定あり

2022年度  
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年 4月 5日

氏名	名倉 正剛	所属	理工学部 ソフトウェア工学科
研究課題	リファクタリング開発と障害復旧の支援によるソフトウェア保守開発支援に関する研究		
研究の種類	個人	グループ	
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究ではソフトウェアの保守開発を支援する方法として、主に次の 2 項目に基づいて研究を遂行することを計画していた。①コーディングスタイルに基づくリファクタリング支援技術の確立 ②発生した障害への対応を支援する技術の検討。</p> <p>① ソフトウェアコードに対するリファクタリング支援技術の確立について</p> <p>前年度は当初の目標としてコーディングスタイルの遵守の状況の分析を実施する予定であったが、より一般的なリファクタリング作業の分析の内容を優先して実施した。今年度は前年度当初に計画していたコーディングスタイルの遵守の状況の分析を実施した。そしてその知見としてコーディングスタイルに関わる規約について、多くのプロジェクトで守られている規約や、違反した場合に直されている規約が存在することを明らかにした。この分析方法と得られた知見については、研究成果公刊の「雑誌」の部に記載の①の成果として査読付き論文誌に掲載された。</p> <p>② 発生した障害への対応を支援する技術の検討について</p> <p>前年度は、ログ情報の発生状況から、ソフトウェアプログラムに対する障害原因特定手法 (SBFL: Spectrum-Based Fault Localization) を利用することにより、原因を示すログを特定する手法を確立した。この方法では障害原因特定が適切に行われない場合が存在し、今年度はその明確化と、改良を予定していた。適切に行われない場合の一つとして、実行時に障害が発生する場合ではなく、実行前に障害が発生する場合のログ情報を対象に、その障害への対応を支援する方法を提案した。具体的には、ソフトウェアをコンパイルしながら実行する場合に、コンパイルエラーが発生した際に、コンパイルエラーメッセージを解消するために必要な技術について、検討を行った。そしてプログラムのミスにより多数のコンパイルエラーメッセージが発生した場合に、着目すべきコンパイルエラーメッセージを抽出する方法を確立した。この方法は、前述のようにコンパイル (ビルド) しながら実行するような場合に実行が失敗した原因がコンパイルであるようなときに、その対応を支援するが、その一方でプログラミング教育においてコンパイルエラーが発生した場合に、学習者がそのエラーメッセージを理解する際にも支援することができる。そこで、プログラミング教育に対する実践的な手法の提案として、研究成果公刊の「雑誌」の部に記載の②の成果として、査読付シンポジウムに採録され、その成果はシンポジウムの最優秀論文賞として表彰された (<a href="https://sites.google.com/site/sigrepit/repit2023">https://sites.google.com/site/sigrepit/repit2023</a>) .</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2022 年度南山大学パッセ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	OSS プロジェクトを対象にした コーディング規約違反発生状況の分 析	書 名	
雑誌名	コンピュータソフトウェア	論 文 名	
巻 号	40 巻 1 号	出 版 社	
発行年月	2023 年 1 月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	pp. 57-82	ペ ー ジ	
著 者 名	名倉正剛, 末次健太郎, 高田眞吾, 尾原秀登, 角幸一郎, 浅原明広	著 者 名	
備 考	済・未 ( 年 月頃予定)	備 考	済・未 ( 年 月頃予定)
DOI	10.11309/jssst.40.1_57		
オープン アクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目	コンパイルエラーメッセージの分類に基づく 初学者へのプログラミング学習支援手法	書 名	
雑誌名	実践的 IT 教育シンポジウム論文集	論 文 名	
巻 号	9 巻	出 版 社	
発行年月	2023 年 2 月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	pp. 63-74	ペ ー ジ	
著 者 名	近藤 亮太, 名倉 正剛	著 者 名	
備 考	済・未 ( 年 月頃予定)	備 考	済・未 ( 年 月頃予定)
DOI	10.11309/repit.2023.0_63		
オープン アクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2022年 3月 7日

氏名	蜂巢吉成	所属	理工 学部 ソフトウェア工学科
研究課題	プログラミング演習課題に対する自動プログラム修正に関する研究		
研究の種類	個人	グループ	
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究の目的は、プログラミング演習課題において、コンパイルはできるが正しい実行結果が得られない学習者に対して、プログラムを自動で修正して、修正方法をフィードバックする学習支援環境を実現することである。</p> <p>知識や経験の少ないプログラミング学習者にとって、コンパイル可能だが期待した実行結果を得られないプログラムの誤り箇所を自力で特定することは難しい。教員や TA による支援は可能であるが、対応できる人数には限りがある。誤り範囲を自動で特定できれば学習者の支援に有効である。Fault Localization や自動プログラム修正に関する研究は多くされているが、プログラミング演習では単に正しい実行結果が得られれば良いのではなく、学習者に誤りを認識させて自力で修正させる必要がある。</p> <p>一般に模範解答には複数の別解が存在するので、誤りを認識させるには学習者の意図に近い別解を選択する必要がある。1つのプログラムの複数の部分ごとに別解がある場合、その組み合わせを網羅すると、模範解答の総数が膨大になりやすい。</p> <p>本研究では、コンパイル可能であるが期待した実行結果が得られない学習者の C プログラムを対象として、誤り範囲を特定する方法を提案した。学習者の解答プログラム(以下、修正対象プログラム)と模範解答のプログラム(以下、模範解答プログラム)をセグメントと呼ぶコード片に分割し、用意したテストケースをパスするまで修正対象プログラムのセグメントを模範解答プログラムのセグメントで置き換えて、誤り範囲を特定する。本研究におけるセグメントは分岐のない連続した文であり、制御文を基にプログラムをセグメントに分割する。セグメントごとに別解を作成することで組み合わせをなくし、模範解答の総数を削減できる。学習者にはセグメントを誤りのある範囲として示し、その中で誤りの箇所や原因を考えさせることができる。</p> <p>提案方法に基づきツールを試作し、誤り範囲の特定に有効であることを確認した。誤りセグメントが2個のプログラムについて、最大約2時間で誤り範囲を特定できた。</p> <p>以上の成果をとりまとめて、国内学会に投稿・発表した。研究成果公刊雑誌②が「コンピュータソフトウェア」への推薦論文となったので、論文を改訂し、投稿した(現在査読中)。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パツヘ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	変数名に対して開発支援を行うための調査と考察	書名	
雑誌名	日本ソフトウェア科学会第39回大会	論文名	
巻号		出版社	
発行年月	2022年8月	出版年月	
ページ	9ページ	ページ	
著者名	松井亮介, 蜂巢吉成, 吉田敦, 桑原寛明	著者名	
備考	済（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済		
②		②	
論文題目	プログラミング演習におけるセグメントを用いたソースコードの誤り箇所特定方法の提案	書名	
雑誌名	ソフトウェア工学の基礎 XXVII (FOSE 2022)	論文名	
巻号		出版社	
発行年月	2022年11月	出版年月	
ページ	pp. 55-60	ページ	
著者名	澤田 侑希, 梅田 祐一郎, 蜂巢 吉成, 吉田 敦, 桑原 寛明	著者名	
備考	済	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		



2022年度  
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年 3月 8日

氏 名	横森励士	所 属	理工学部ソフトウェア工学科
研 究 課 題	利用関係を用いたソフトウェア部品分類手法の活用方法についての調査研究		
研 究 の 種 類	個人	グループ	
共 同 研 究 者			
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>ソフトウェアを構成する部品の数は、年を経るごとに増大していき、管理が難しくなっていく。ソフトウェア部品の中には、デザインパターンをソフトウェア内のいろいろな場所で採用することでソフトウェアの中で担う役割が似ている部品、継承を用いてある概念に基づいて作られた部品、特定の対象を扱うために機能群として扱うことができるような部品、のように類似性を見出すことができ、ひとまとめにして理解すると効率的に理解できるような部品というものが多く存在している。</p> <p>我々の研究グループでは、ソフトウェア内の各部品の利用関係を抽出し、それぞれの部品の利用部品の一致状況から部品間の類似度を求め、そこから距離行列を作成し、階層的クラスタ分析を行うといった、ソフトウェア部品の分類手法を提案している。</p> <p>今年度の研究成果として、当初計画の 2 である、ソフトウェアの各バージョンに対して適用した場合に、機能的に共通点をもった部品群がどのように形成されていくのかの調査を行い、その実験結果をまとめた論文を国内会議へ投稿した。</p> <p>結果の概要として、ソフトウェアが成長するに従い、新たな部品群が形成されることが分かった。その新たに形成される部品群の半数は単に追加された部品から形成されるケースであった。一方、残りの半数は既存の部品が新たに部品を利用するようになることで、既存の部品が新たに部品群化するケースであった。このことは、ソフトウェア内の部品の追加が、保守活動において、その中の関係を整備する活動として行われていることを示している。さらに、その活動が拡張性などの保守性の向上に貢献していることを示している。品質向上に関することが行われたことを示すメトリクスとして提案手法を生かすことができるのではないかと考えられる。来年度以降、これらの想定に基づいてさらなる評価実験を行い、その成果をまとめて、論文誌などへの投稿を計画している。</p> <p>また、当初計画の 1 である手法の有効性を確認するための実験結果をまとめた論文の投稿、関係者と相談した結果、実験の内容を整理して論文を改訂することとした。今後、必要な実験を行い、その成果をまとめて、論文誌などへの投稿を計画している。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パッヘ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	ソフトウェア部品の利用関係に基づくクラスタリングの進化分析	書名	
雑誌名	ソフトウェア工学の基礎 29	論文名	
巻号	日本ソフトウェア科学会編レクチャーノートソフトウェア工学48	出版社	
発行年月	2022/11	出版年月	
ページ	97-102	ページ	
著者名	横森励士	著者名	
備考	済	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	予定なし		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		



## 研究成果公刊（計画を含む）

「2022 年度南山大学パツヘ研究奨励金 I-A-1」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	技術者倫理におけるハリケーン・カトリーナによる 大災害事例に関する文献研究	書 名	
雑誌名	工学教育	論文名	
巻 号	第71巻 第2号	出版社	
発行年月	2023年3月	出版年月	
ペ ー ジ	pp. 8-13	ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	○済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI	<a href="https://doi.org/10.4307/jsee.71.2_8">https://doi.org/10.4307/jsee.71.2_8</a>		
オープンアクセス	○済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論文名	
巻 号		出版社	
発行年月		出版年月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2023年 4月 24日

氏名	白石高章	所属	理工 学部
研究課題	不等平均と不等分散の同時推測法		
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究では、<math>k</math> 標本 2 次元正規分布モデルを考えた。この場合、各標本の平均と分散は未知で同一である必要がなく不等であって良い場合に、<math>k</math> 個の相関係数の同時推測法について研究を行なった。1 標本 2 次元正規分布モデルの相関係数の解析にはフィッシャーの <math>z</math> 変換による統計量が使われる。この <math>z</math> 変換による統計量の漸近正規性は Anderson (2003) に書かれているが、それとは異なる証明を与えた。この漸近理論を基に、分散共分散行列が未知の 2 次元正規分布に従う <math>k</math> 標本モデルにおける相関係数を多重比較する手法について提案した。</p> <p>1つ目の論文として、<math>k</math> 個の相関係数の同時信頼区間、シングルステップのすべての相関係数の多重比較検定、マルチステップの多重比較検定の理論を構築し、その理論を基に良い手法の提案を行った。さらに、これらの手法を適用したデータ解析の例として、脊椎動物の全長と寿命の相関係数を解析した。その結果、どの種族も寿命と全長には正の相関があると考えられる。特に哺乳類が強い相関を示し、爬虫類は他の種族より相関が弱いことが分かった。哺乳類に関して、人間に比べてクジラなど全長が何メートルに及ぶ生き物でさえ 60 年も生きないことと、この強い相関が見られることは、人間が全長に対して寿命が異常に長いことをあらわしている。</p> <p>観測値が未知の分散で同一である正規分布に従う <math>k</math> 群モデルにおけるすべての平均相違の多重比較法が白石 (2011a) によって論じられている。また、対照群との平均相違の多重比較法は白石(2011b) によってレビューされている。正規分布の下で平均に順序制約のある場合の母平均の多重比較法は白石・杉浦 (2018) によってレビューされている。2つ目の論文では観測値が 2 次元正規分布に従う <math>k</math> 標本モデルにおいて、フィッシャーの <math>z</math> 変換を基に、分散共分散行列が未知の 2 次元正規分布に従う <math>k</math> 標本モデルにおける相関係数の相違を多重比較する手法について提案した。これらの手法は、1つ目の論文の論文とは異なる <math>k</math> 個の相関係数の差の同時信頼区間、相関係数相違に対するシングルステップの多重比較検定、マルチステップの多重比較検定であった。</p> <p>以上の多標本相関係数の推測は、多重比較法としては他の研究者が手を付けていないはじめての理論であり手法である。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	多群 2 次元正規分布モデルにおけるすべての相関係数の多重比較法とその応用	書 名	
雑誌名	南山大学紀要『アカデミア』理工学編	論 文 名	
巻 号	23 巻	出 版 社	
発行年月	2023 年 3 月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	11-19	ペ ー ジ	
著 者 名	横山颯, 安田竜規, 白石高章	著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
②		②	
論文題目	多群 2 次元正規分布モデルにおける相関係数相違の多重比較法	書 名	
雑誌名	南山大学紀要『アカデミア』理工学編	論 文 名	
巻 号	23 巻	出 版 社	
発行年月	2023 年 3 月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	20-37	ペ ー ジ	
著 者 名	白石高章	著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）

2022年度  
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2022年4月1日

氏名	塩濱 敬之	所属	理工学部データサイエンス学科
研究課題	多様体上の統計モデルの構築とその位相的データ解析への応用		
研究の種類	個人		
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究課題で扱う幾何的な構造をもった空間とは、私たちの身近に存在する、円周や球、トーラスやシリンダーといった幾何多様体のことを指す。例えば、ユーザと商品からなる 2 部グラフ、スポーツにおける個人やチームの勝敗といったネットワークデータはネットワークを構成する頂点とリンクの関係性から幾何的な構造を有する。このような構造は位相的でデータ解析に応用されるため本研究の重要テーマである。2022 年度の研究成果の概要は以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 推薦システムにおいて、新規ユーザに対する商品の推薦および、新規アイテムを推薦することは、ユーザや商品の購入履歴が存在しないため困難な場合が生じる。このような問題をコールドスタート問題という。このような問題に対応するためにユーザ属性や商品属性をトピックモデルを通して特徴抽出を行い、評価値を得る手法を提案し推薦システムの評価を行った (Kawai, Sato, and Shiohama, 2022)。</li> <li>2) 円周、シリンダー上に値をとる確率分布および、その歪対称分布における母数の識別可能性問題を考え、いくつかのそのような多様体状の確率モデルにおける母数の識別可能性を示した。(Miyata, Shiohama, and Abe; 2022)。</li> <li>3) Massey のレーティング手法のネットワーク中心性としての解釈を紹介し、その統計的性質を検証した。データ解析として ATP ツアーデータを用いたプロテニスプレーヤーのレーティング推定を行った (黒木・塩濱, 2022)。</li> <li>4) 他尺度地理的荷重回帰モデルを用いた東京都公示地価データの空間統計分析を行った。分析結果から、東京都の地価はこの 20 年余りで、局所回帰係数の推定値の分布のレンジの増大により、地価に対する個々の土地が持つ個別的要因が大きくなること、および、利便性を表す環境要因の経年変化により、23 区中央部・南部と、その他の地域での土地の価格差が大きくなる傾向であることがわかった (Kanno and Shiohama, 2022)。</li> <li>5) 円周や、トーラス、シリンダー上の確率分布をいくつか提案し、提案した確率モデルの識別可能性や最尤推定量の一致性を紹介した。(Abe, Imoto, Shiohama, Miyata, 2022)。</li> </ol>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Topic model-based recommender systems and their applications to cold-start problems	書名	Data Analysis and Related Applications 1
雑誌名	Expert Systems with Application	論文名	Geographically Weighted Regression for Official Land Prices and their Temporal Variation in Tokyo
巻号	202, 15	出版社	John Wiley & Sons
発行年月	September, 2022	出版年月	November, 2022
ページ	19pages	ページ	261-274
著者名	Kawai, M., Sato, H., Shiohama, T.	著者名	Kanno, Y. Shiohama, T.
備考	済	備考	済
DOI	<a href="https://doi.org/10.1016/j.eswa.2022.117129">https://doi.org/10.1016/j.eswa.2022.117129</a>		
オープンアクセス	予定なし		
②		②	
論文題目	Identifiability of asymmetric circular and cylindrical distributions	書名	Directional Statistics for Innovative Applications
雑誌名	Sankhya A	論文名	On Some Flexible Models for Circular, Toroidal, and Cylindrical Data
巻号	Online published	出版社	Springer, Singapore
発行年月	September, 2022	出版年月	June, 2022
ページ	21pages	ページ	220-243
著者名	Miyata, Y., Shiohama, T., Abe, T.	著者名	Abe, T., Imoto, T., Shiohama, T. and Miyata, Y.
備考	済	備考	済
DOI	<a href="https://doi.org/10.1007/s13171-022-00294-3">https://doi.org/10.1007/s13171-022-00294-3</a>		
オープンアクセス	予定なし		



③		③	
論文題目	Massey のレーティング指標の統計的性質と そのネットワーク分析への応用	書名	
雑誌名	行動計量学	論文名	
巻号	49号2巻	出版社	
発行年月	2022年9月	出版年月	
ページ	237-251	ページ	
著者名	黒木裕鷹, 塩濱敬之	著者名	
備考	済	備考	済・未 ( 年 月頃予定)
DOI			
オープンアクセス	予定なし		

2022年度  
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

年 月 日

氏 名	梅比良 正弘	所 属	理工学部・電子情報工学科
研 究 課 題	通信・レーダ融合ワイヤレスシステムのためのセンシング基盤技術の研究		
研 究 の 種 類	個人	グループ	
共 同 研 究 者			
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>自動運転等では、近い将来、周囲環境をセンシングするレーダと、車同士または車と信号機などのインフラとの通信が必要になると予想されている。そこで、本研究では、1つの装置で Gbps 級の高速通信と距離・速度のセンシングを同時に行うことのできる通信・レーダ融合ワイヤレスシステムの実現を目標としている。</p> <p>自動運転などでは、0.1m 程度の距離分解能と、200m 程度の最大検知距離が必要になることから、広い周波数帯域が利用可能なミリ波帯での利用を前提し、ピーク電力/平均電力比の小さな信号として、DFTs-OFDM 信号とシングルキャリア変調信号を候補として検討を進めた。これらの変調信号を前提とした時、送信信号とターゲットから反射されて受信される信号との相関検出により、ターゲット検出と距離測定を行う PMCW (Pulse Modulation Continuous Wave) 方式が有望となるが、送信信号に使用する符号系列が問題となる。従来は M 系列などの 2 値系列が使用されていたが、近年の高周波回路技術の進展を考慮して、複素系列であるが、一定振幅で理想的な自己相関特性を有する Zadoff-Chu 系列を用いた PMCW レーダの着想に至り、その相関検出特性をコンピュータシミュレーションにより評価した。実際の送信信号では、通信とレーダの周波数教養を行うため、帯域外漏洩電力、隣接チャネル間干渉を低減する必要があるため、整合フィルタの一つであるロールオフフィルタを用いた場合の相関検出特性を評価し、ロールオフ率 1.0 の場合がレンジサイドローブを小さくでき、最も優れた相関検出特性が得られることを明らかにした。また、Zadoff-Chu 系列の系列長、シンボル周期と、レーダの距離分解能、最大検知距離との関係などの設計条件を明らかにし、電子情報通信学会 宇宙航空エレクトロニクス研究会において、提案の PMCW レーダの基礎検討結果として「レーダ・通信融合のための Zadoff-Chu 系列を用いた PMCW レーダの基礎検討」の論文発表を行った。</p> <p>なお、この検討結果をベースとして、科学研究費補助金 基盤研究 C「通信・レーダ融合システムのための DFTs-OFDM-PMCW レーダの研究」の提案を行い採択されている。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	レーダ・通信融合のための Zadoff-Chu 系列を用いた PMCW レー ダの基礎検討	書 名	
雑誌名	電子情報通信学会 技術研究報告	論 文 名	
巻 号	SANE2022-108	出 版 社	
発行年月	2023年3月2日	出版年月	
ペ ー ジ	pp. 54-59	ペ ー ジ	
著 者 名	梅比良 正弘	著 者 名	
備 考	済・未 (2023年 3月頃予定)	備 考	済・未 ( 年 月頃予定)
DOI			
オープンア クセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出版年月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未 ( 年 月頃予定)	備 考	済・未 ( 年 月頃予定)
DOI			
オープンア クセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出版年月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未 ( 年 月頃予定)	備 考	済・未 ( 年 月頃予定)
DOI			
オープンア クセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年 3月 16日

氏名	藤井勝之	所属	理工学部
研究課題	超音波振動を用いた脱気によるファントム作製の安定化		
研究の種類	グループ		
共同研究者	Shingo Hayashi, Yasuyuki Okumura, Masahiro Umehira		

**研究実績の概要** (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)

情報通信機器の小型・軽量化に伴い、ウェアラブル機器を身につけることが一般的となり、それらにより発生する電磁波の人体への作用を評価する必要性が高まっている。人体と電磁波の相互作用を評価する際に、実際の人体を用いる事は物理的、道徳的に困難であり、生体組織の電気的特性(比誘電率, 導電率)を模擬した生体等価ファントムの開発が広く行われている[1]。生体等価ファントムを利用することで、簡単に繰り返し測定ができ、再現性のある測定結果と数値解析による推定値との比較により信頼性のある評価が可能となる。しかしながら、生体等価ファントムの作製方法は料理のレシピと似ており[2], 所望の電気定数を持つ生体等価ファントムが完成するかどうかは作製者の熟練度に依存するところが大きい。また、従来のファントム製造過程では、気泡が混入すると電気定数に影響を与えるため、作製者の経験と勘に頼る部分が多いなどの課題があった。そこで本研究では、ファントムの製造過程に着目し、凝固前に超音波振動を与えて脱気することで従来の経験や勘に頼らずに気泡の混入を回避するファントムの作製方法を提案し、その有効性を検証した。その結果、比誘電率の最大値と最小値の差は約 1.72 倍、導電率は約 1.85 倍改善され、提案手法の有効性を実証した[3]。

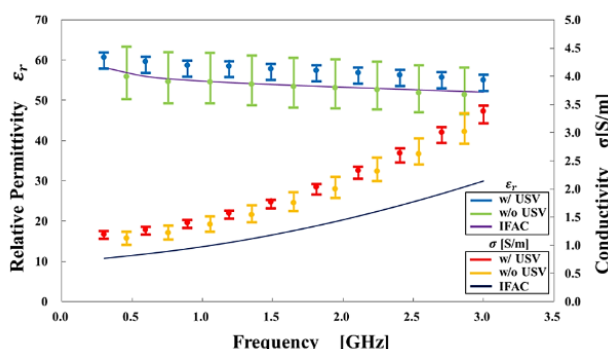


図1 超音波振動の有無による比誘電率と導電率の周波数特性[3]

[1] A. Rakhmadi, K. Saito, "Development of 500kHz muscle equivalent solid phantom," IEICE ComEX, vol. 9, no. 11, pp. 519-523, Nov. 2020.

[2] L. Hamada, K. Furuya, K. Ito, "Biological Tissue-Equivalent Phantom for Microwave Hyperthermia," Japanese Journal of Hyperthermic Oncology, vol. 14, no. 1, pp. 31-40, Mar. 1998.

[3] S. Hayashi, K. Fujii, Y. Okumura, M. Umehira, "Stabilization of phantom fabrication by degassing using ultrasonic vibrations," IEICE ComEX, vol. 11, no. 5, pp. 229-233, May 2022.

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Stabilization of phantom fabrication by degassing using ultrasonic vibrations	書名	
雑誌名	IEICE Communications Express	論文名	
巻号	vol.11, no.5	出版社	
発行年月	May 2022	出版年月	
ページ	pp. 229-233	ページ	
著者名	S. Hayashi, K. Fujii, Y. Okumura, M. Umehira	著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
DOI	10.1587/comex.2022XBL0021		
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目	Performance evaluation of antenna using the human body as an element	書名	
雑誌名	Proc. of the 2022 IEEE GCCE	論文名	
巻号		出版社	
発行年月	Oct. 2022	出版年月	
ページ	pp.196-197	ページ	
著者名	R. Kanematsu, K. Fujii, Y. Okumura, M. Umehira	著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
DOI	10.1109/GCCE56475.2022.10014323.		
オープンアクセス	予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年3月1日

氏名	横山哲郎	所属	理工学部
研究課題	効率的プログラム可逆化を支援するプログラミングとプログラミング言語に関する研究		
研究の種類	個人		
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>可逆計算機システムはハードウェアからソフトウェアまで一貫して可逆性をもつシステムでありその中心的な役割を果たすのがソフトウェアである。我々は可逆コンピューティングの原理をプログラミング言語の観点から研究してきた。特にクリーン性は可逆ハードウェアのメリットを最大限に享受するために重要な性質であるととらえて、その性質をもつ可逆プログラミング言語を設計及び開発してきた。このことを踏まえて過去に行ってきた研究を総括して整理を行った。具体的には、計算可能性、単射化、可逆化などの概念を詳解し、関連する概念との関係を述べた。言語の設計にも役に立つ可逆更新や可逆的反復などの代表的な言語要素を詳解した。さらに、プログラム逆変換、逆解釈/逆意味論、可逆解釈、反転、半可逆化、混合的なアプローチ(半可逆化+可逆解釈)についてその相互関係を含めそれぞれ詳しく解説した。主要な可逆プログラミング言語 Janus を例として用いたが、特にこの言語に依存するものではなく、単純な変更で様々な可逆言語でも成り立つ性質について議論した。</p> <p>可逆性制約によって、計算過程で消去できないデータがゴミ出力として出力される。このように可逆計算及び隣接分野では発熱に繋がるゴミ出力量を最小化することが最重要な課題のひとつである。</p> <p>本研究の課題は、任意の関係 <math>R</math> に対してゴミ出力最小で効率的な可逆化ができるかであった。すなわち、<math>R</math> が任意の部分関数のとき可逆化できその効率的な構成法を示せるかであった。文献②において、これらが肯定的に解決できたことを発表した。</p> <p>任意の関係 <math>R</math> に対してそうした可逆化が構成可能であることが示されたのは理論的に重要である。一方で、この構成は一般には非常に実行ステップ数が大きい。したがって、当然ながら <math>R</math> が特定の問題領域の部分関数のとき可逆化できその効率的な構成法を示せるかという問題が引き続き研究が必要である。</p> <p>効率的プログラム可逆化を支援するプログラミング言語という観点は、残念ながら検討が不十分に終わってしまった。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Reversible Computing from a Programming Language Perspective	書名	
雑誌名	Theoretical Computer Science	論文名	
巻号		出版社	
発行年月	December 22, 2022 (Pre-proof)	出版年月	
ページ	1-27	ページ	
著者名	Robert Glueck and Tetsuo Yokoyama	著者名	
備考	済	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI	10.1016/j.tcs.2022.06.010		
オープンアクセス	予定あり		
②		②	
論文題目	Making Programs Reversible with Minimal Extra Data	書名	
雑誌名	New Generation Computing	論文名	
巻号	40	出版社	
発行年月	July 4, 2022	出版年月	
ページ	467-480	ページ	
著者名	Robert Glueck and Tetsuo Yokoyama	著者名	
備考	済	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI	10.1007/s00354-022-00169-z		
オープンアクセス	予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年 3月 31日

<b>氏名</b>	栞原 寛明	<b>所属</b>	理工学部 電子情報工学科
<b>研究課題</b>	情報流解析における検査アルゴリズムのサービス化		
<b>研究の種類</b>	個人	グループ	
<b>共同研究者</b>			
<b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)			
<p>本研究では、情報流解析のための検査器を複数のプログラミング言語向けに効率的に実現することを目的として、型検査に基づく情報流解析の検査アルゴリズムの研究を行った。主に以下の項目について研究を進めた。</p> <p><b>Rust プログラム向け情報流解析のための型検査アルゴリズム</b></p> <p>これまで進めてきた Rust プログラム向けの情報流解析に関する研究で構築した型システムをもとに、制約充足問題に帰着させる方法で型検査アルゴリズムを検討した。その過程において、従来研究で定義した Rust 言語の意味論に不備が見つかり、その修正を検討した。その結果として、従来研究で対象としていた Rust 言語のサブセットは、情報流解析と Rust 言語の所有権システムの関係性を明らかにするという従来研究の本来の目的に対して仕様がやや複雑であり、より簡潔なサブセットを用いるほうが良いと判断した。</p> <p>以上より、型検査アルゴリズムの研究は一時的に休止することとし、さらに検討を重ねた結果、Rust 言語のサブセットの代わりに Rust コンパイラの内部で利用される中間表現である Rust MIR を対象とする情報流解析の研究を進めることにした。</p> <p><b>Rust MIR を対象とする情報流解析のための型システム</b></p> <p>Rust MIR は Rust コンパイラで利用される中間表現であり、Rust プログラムを制御フローグラフとして表現する。制御フローグラフのノードは基本ブロックであり、基本ブロックは代入文、関数呼び出し、基本ブロック間のジャンプから構成される。構文に着目すると、Rust MIR プログラムは Rust プログラムと比較して非常に簡潔であり、Rust MIR プログラムを対象とする情報流解析のための型システムをシンプルな形で定式化できた。定式化における大きな課題は参照と所有権システムの扱いである。本研究では参照のみに対応できており、所有権システムへの対応は今後の課題として残されている。</p> <p>以上の成果に関して学会発表を行った。現在、非干渉性に対する健全性の証明を進めており、所有権システムへの対応を含め研究を継続する計画である。</p>			



## 研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パッへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Rust MIR に対する情報流解析の型システムの検討	書 名	
雑誌名	ソフトウェア工学の基礎 XXIX	論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月	2022/11	出 版 年 月	
ペ ー ジ	67-72	ペ ー ジ	
著 者 名	桑原寛明	著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目	プログラミング演習におけるセグメントを用いたソースコードの誤り箇所特定方法の提案	書 名	
雑誌名	ソフトウェア工学の基礎 XXIX	論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月	2022/11	出 版 年 月	
ペ ー ジ	55-60	ペ ー ジ	
著 者 名	澤田侑希、梅田祐一郎、蜂巢吉成、吉田敦、桑原寛明	著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・**一般**) 研究成果報告書

2022年 4月 10日

氏名	稲垣 伸吉	所属	理工学部 機械システム工学科
研究課題	接地点伝播計画に基づく多脚移動ロボットのマルチモード歩行制御の実現		
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究の目的は、災害地のような未知で複雑な不整地環境を、柔軟にかつ頑健に移動することができる多脚ロボット(6脚以上の脚を持つ移動ロボット)の実現を目指し、それに必要となる種々の制御技術を開発し、多脚ロボットへの実装と実証実験を通して、その有用性を示すことである。</p> <p>本奨励金を受けた 2022 年度の研究において、以下の研究成果を得た。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li> <p><u>リアルタイム接地点計画を用いた 6 脚ロボットの不整地ナビゲーション制御</u></p> <p>6 脚ロボットなどの脚移動ロボットが不安定な未知環境において動作するためには、歩容や足回りの制御だけでなく、ロボットが自身の歩行する環境を認識し、より安定的な動作を計画して行動する必要がある。そこで本研究では、ロボット前方の地形認識手法と改良した接地点計画手法および、不整地ナビゲーションを可能にする操作系を新たに提案した。そして、提案手法を 6 脚ロボット SOL に実装し、屋外における実環境において不整地歩行実験を行い、提案手法の有効性を示した。</p> </li> <li> <p><u>接地点追従法の改良による旋回歩容と少数脚歩行の実現</u></p> <p>多脚ロボットは、脚数が多いことから脚の故障や脚を用いた物体の操作などへの転用に柔軟に対応することが求められる。また、直進だけでなく旋回や横歩きなどの多様な移動も実用上必要となる。本研究では、歩容制御「接地点追従法」に新たに脚間隣接情報を導入した。これは、歩行に用いる脚数や進行方向に合わせて隣接情報を切り替え、接地点の追従関係を変えることで前述の要求を満たす多様な歩行を実現するという手法である。屋内に不整地環境を設置し、実機実験を通して提案手法の有効性を示した。</p> </li> <li> <p><u>接地点追従型 6 脚ロボット 6 脚ロボット SOL の開発</u></p> <p>6 脚ロボットの実用化に向けて企業と共同で 6 脚ロボット SOL の開発を進めた。これまでに開発した歩容制御である接地点追従法をベースとして、各脚の局所制御やリアルタイム接地点計画を統合した歩行制御法の導入を進めた。特に接地点計画における環境認識センサの選定や設置方法を、実験を通して検証し、それに合わせて接地点の計画手法の改良を進めた。また、屋外実験を通して実用化に向けて必要な実機性能や制御性能について検討し、開発予定の SOL の新設計に向けた今後の研究課題を明確化した。</p> </li> </ol>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2020年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	リアルタイム接地点計画を用いた 6脚ロボットの不整地ナビゲーション制御	書名	
雑誌名	第35回自律分散システム・シンポジウム予稿集	論文名	
巻号		出版社	
発行年月	2023年1月23日	出版年月	
ページ	223-228	ページ	
著者名	棚田晃世, 稲垣伸吉, 細萱広高, 村田勇樹, 加藤亮太, 鈴木達也	著者名	
備考	済	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目	Gait Transition to Spinning Gait and Fewer-Legged Walking for Hexapod Robot Based on FCP Gait Control	書名	
雑誌名	IFAC World Congress 2023	論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名	Hiroataka Hosogaya, Shinkichi Inagaki, Yuki Murata, Tatsuya Suzuki	著者名	
備考	未（2023年7頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目	接地点追従型6脚ロボットの研究 展開と SOL	書名	
雑誌名	日本ロボット学会誌	論文名	
巻号	Vol. 41, No. 3	出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名	稲垣伸吉, 村田勇樹	著者名	
備考	未（2023年6頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2022年度  
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年 3月 24日

氏名	大石 泰章	所属	理工学部 機械システム工学科
研究課題	後退地平方式によるスパーズ制御の実現		
研究の種類	(個人)	グループ	
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究では、省エネルギーのために有用なスパーズ制御を閉ループ方式で実現するため、後退地平方式を適用することを目指し、以下の3つの課題に取り組んだ：</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 増加する重みを使ったスパーズ制御の実現；</li> <li>2. 増加する重みを使わないスパーズ制御の実現；</li> <li>3. 最適な非線形サンプル値制御の数値計算法。</li> </ol> <p>「増加する重みを使ったスパーズ制御の実現」では、前年度に得た実験結果を理論的に正当化することを目指して研究を行った。増加する重みを制御入力に加えてから最小化すると、後退地平方式によるスパーズ制御の実現ができることが実験的にわかっている。最小原理を使って、この場合の最適な制御入力について調べると、一定時刻以降は零になることが示せる。これは固定した地平における最適制御入力の性質であるが、このことに着目すると、後退地平方式の制御入力が十分長い地平において最適であることがわかる。前述の通り、最適な制御入力は一定時刻以降で零になるから、以上によって後退地平方式の制御入力がスパーズになることが結論される。</p> <p>「増加する重みを使わないスパーズ制御の実現」では、前段の研究を発展させ、増加する重みを使わないでスパーズ制御を実現する方法を考察した。増加する重みを制御入力に加えてから最小化することは、本来の目的関数を修正していることになり望ましくない。状態を安定部分空間と不安定部分空間に分解し、不安定部分空間の状態のみに注目して後退地平方式を適用すると、スパーズ制御が実現できることが確認できる。まだ実験的にその効果が確認できているにすぎないが、増加する重みを使った場合よりもスパーズな制御入力が得られることがわかっており、実用上有望であると考えられる。</p> <p>「最適な非線形サンプル値制御の数値計算法」では、前年度までに開発した安定多様体法にもとづくサンプル値制御系の設計法について、その数値計算法の性質を解析した。この方法では、1 サンプル時間における制御対象の時間発展とそのパラメータ感度を数値計算によって計算し、これに基づいて最適な制御入力を得る。時間発展とパラメータ感度を Runge-Kutta 法を使って計算する場合、その数値誤差は刻み幅の4乗に比例するが、このとき得られる制御入力の誤差も同程度であることがわかった。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Optimal nonlinear control under the sampled-data control scheme	書名	
雑誌名	Proceedings of the 10th IFAC Symposium on Robust Control Design	論文名	
巻号	—	出版社	
発行年月	2022年8月	出版年月	
ページ	pp. 72-75	ページ	
著者名	大石泰章・坂本登	著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目	Generation of a sparse input with a receding-horizon technique: optimality in the infinite horizon	書名	
雑誌名	Proceedings of the SICE International Symposium on Control Systems 2023	論文名	
巻号	—	出版社	
発行年月	2023年3月	出版年月	
ページ	電子出版	ページ	
著者名	大石泰章・岩田拓海・永原正章	著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年 4 月 7 日

氏 名	坂本登	所 属	理工学部機械システム工学科
研 究 課 題	ターンパイク理論による L1 最適およびスパス最適制御へのアプローチ		
研究の種類	個人		
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>&lt;研究目的(概要)&gt;</p> <p><b>背景:</b> 最適制御理論において、ターンパイク現象が L1 最適制御(燃料最小制御)やスパス最適制御と密接に関係していることが、申請者と E. Zuazua 氏、永原氏らとの共同研究により明らかになってきた。本件申請研究では、メカニカルシステムという実システムのカテゴリーに対し、ターンパイク軌道(制御入力および出力軌道)を効率的かつ高精度で計算する理論の開発と実験検証を行った。</p> <p><b>主要成果:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● ターンパイク性が注目を集める理由の一つである制御系の効率化に着目し、メカニカルシステム特有の力学的特性をどのように利用可能であるか調べた。</li> <li>● L1 最適制御/スパス最適制御がターンパイク現象としてメカニカルシステムに対して発現するメカニズムを明らかにした。</li> <li>● L1 最適制御/スパス最適制御には不連続的な制御則が現れることが知られている。不連続な微分方程式の解を扱う Filippov 理論などを援用した近似的設計理論を開発した。</li> <li>● 力学的に拡張し、人工衛星の軌道投入問題など、航空宇宙分野への応用を開発した。</li> </ul> <p>メカニカルシステムとしては、具体的に倒立振り子実験装置を想定した。最適制御の評価関数は局所的に可安定性と可検出性が成立つように設定することで、最適性の必要条件から得られるハミルトン正準方程式(ハミルトン・ヤコビ方程式の特性方程式と言ってもよい)に安定多様体が存在し、ラムダ補題が適用できる状況を確保した。これにより、ホモクリニック軌道近傍にターンパイク軌道が存在することが数値計算によりわかった。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2022 年度南山大学パツヘ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	When does stabilizability imply the existence of infinite horizon optimal control in nonlinear systems?	書 名	
雑誌名	Automatica	論 文 名	
巻 号	147	出 版 社	
発行年月	2023 年 1 月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	110706	ペ ー ジ	
著 者 名	Noboru Sakamoto	著 者 名	
備 考	済	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI	10.1016/j.automatica.2022.110706		
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年 4月 5日

氏名	杉本謙二	所属	理工学部機械システム工学科
研究課題	フィードフォワード型適応制御と機械学習の融合に向けての基礎検討		
研究の種類	(個人) グループ		
共同研究者	なし		
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究の長期的な目標は、人工知能の一分野である機械学習と、申請者が提案しているフィードフォワード型適応制御を融合させ、車両・ドローンの自動運転やロボット・機械の制御に役立つ実用的手法を開発することである。22年度は本学に着任した初年度であるため、この目標に到達するための基礎的な検討を行った。</p> <p>これとは別に、車両・ドローンの自動運転に関する実験的研究は、科研費の課題(計測・通信品質が保証されない環境下の多目的フィードフォワード最適制御と強化学習)として、主に前任校の研究室の同僚や大学院生とともに推進した。具体的には、車両型小型移動ロボットの隊列走行(一列に並んで追従させる)と水中ドローンの自律運転について、前者は実機を想定した数値シミュレーション、後者は学内プールでの実機実験を行ってきた。</p> <p>一方、本パツへ研究奨励金 I-A-2 の研究課題としては、上記の結果を踏まえつつ、フィードフォワード型適応制御の理論的検討に取り組んだ。一般にフィードフォワード制御はモデル化誤差に脆弱であると言われていたが、我々は適応学習の手法により誤差を補正し、車両のモデルが多少は不正確であっても隊列走行の縦方向制御を精密に行う手法を提案している。本研究ではモデル化誤差に加え、路面の傾斜などによる想定外の力(外乱と呼ばれる)に対しても適応的に誤差補正を行うように手法を改良することに成功した。また、実用の際はノイズや計測ミス・通信障害などの問題が避けられないが、これらのランダムな発生に対して確率的な(準)最適性を保証する手法や、設定した範囲内では安定性を保証する手法を開発した。これらは国内の講演会や国際会議で発表し、現在は論文誌へ投稿中である。</p> <p>以上のように適応制御については順調に研究を進めることができたが、機械学習との融合については基礎的な段階に留まっている。適応制御と機械学習は発想が似ているものの、基盤となる技術は全く異なるため、時間をかけてじっくり取り組む必要がある。</p>			



## 研究成果公刊（計画を含む）

「2022 年度南山大学パツヘ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	オンライン調整を伴う 2 自由度構成による隊列走行の縦方向制御	書 名	
雑誌名	計測自動制御学会論文集	論 文 名	
巻 号	58 巻 10 号	出 版 社	
発行年月	2022 年 10 月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	443/450	ペ ー ジ	
著 者 名	中尾、小林、杉本	著 者 名	
備 考	済	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI	TR 0010/22/5810-0443		
オープンアクセス	予定なし		
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年 4月 5日

氏名	中島 明	所属	理工学部機械システム工学科
研究課題	内部車両駆動型球体ロボットの制御		
研究の種類	個人		
共同研究者	なし		
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>人間が容易に立ち入れない環境(災害現場, 原子炉など)において活動する極限作業ロボットが備えるべき最も重要な機能は, 過酷な環境を走破する「高い機動性」である. 本研究では, 無方向性であるため環境への高いロバスト性を持ち, かつ, 直感的な操作性の良い, 球体内部の車両により駆動する「内部車両駆動型球体ロボット」に関する制御を取り扱った.</p> <p>内部駆動型機構の開発の第 1 ステップとして, 振り子アーム型での駆動機構の例として, PenduBot (2 リンクアーム, 第 2 関節が非駆動) の安定化制御に取り組んだ. 具体的には, 対象の非線形性を考慮した VDSE オブザーバによる精密な状態推定を行った. 本手法は非線形である対象システムを線形表現形式に変換し, 線形理論に基づくオブザーバの最適推定解を得るためのリッカチ方程式を状態依存形式で導出し, 毎時刻リアルタイムに解を求める手法であり, 線形近似した手法と比較して高精度な結果を得た. 次に, 大域的に安定化可能な非線形最適制御の開発を行った. 本手法では, 対象を一切線形化せずに大域的な最適制御則を求めるものであり, パラメータを変更することにより, 1 回振り上げ, 2 回振り上げといった様々な最適軌道を得ることに成功している. 一方, 移動ロボットの動作においてより直感的な操作を目指し, 人間の腕の筋電位から指令値を生成する技術の開発に取り組んだ. 具体的には, 腕の肩と肘の周辺に貼付した筋電位センサ信号から関節角度をリアルタイム推定可能なモデル同定に取り組んだ. ここでは, 腕のダイナミクス構造が既知であることから, 速度, 加速度, 遠心・コリオリ力, 重力の影響といった構造を反映した回帰ベクトルをカスタムリグレッサにより構成することで, 従来より少ないモデルパラメータでも高精度な推定結果を得ることに成功している. これらいずれの研究課題についても良好な結果を得ることができ, 全て学会にて発表を行った.</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2022 年度南山大学パッへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	メカニカルシステムにおける VDSE オブザーバの評価—Pendubot を用いたケーススタディー—	書 名	
雑誌名	第 65 回自動制御連合講演会予稿集	論 文 名	
巻 号	なし	出 版 社	
発行年月	2022 年 11 月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	732-737	ペ ー ジ	
著 者 名	磯村真也, 坂本登, 中島明	著 者 名	
備 考	済	備 考	済・未 ( 年 月頃予定)
DOI			
オープンアクセス	予定あり		
②		②	
論文題目	Pendubot の非線形最適制御による振り上げ安定化制御	書 名	
雑誌名	第 10 回計測自動制御学会制御部門マルチシンポジウム予稿集	論 文 名	
巻 号	なし	出 版 社	
発行年月	2023 年 3 月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	ID : 3A7-4 (5 ページ)	ペ ー ジ	
著 者 名	磯村真也, 坂本登, 中島明	著 者 名	
備 考	済	備 考	済・未 ( 年 月頃予定)
DOI			
オープンアクセス	予定なし		
③		③	
論文題目	筋電位からの関節角度推定における NARX モデルの回帰ベクトル構成に関する実験的考察	書 名	
雑誌名	第 10 回計測自動制御学会制御部門マルチシンポジウム予稿集	論 文 名	
巻 号	なし	出 版 社	
発行年月	2023 年 3 月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	ID : 1A3-5 (5 ページ)	ペ ー ジ	
著 者 名	小川司, 中島明, 坂本登	著 者 名	

備 考	済	備 考	済・未 ( 年 月頃予定)
DOI			
オープン アクセス	予定なし		

2022年度  
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年 3月 16日

<b>氏名</b>	本田晋也	<b>所属</b>	理工学部 機械システム工学科
<b>研究課題</b>	組込みシステム向けのパーティショニング環境におけるデバイス及びミドルウェア共有に関する研究		
<b>研究の種類</b>	個人	グループ	
<b>共同研究者</b>			
<b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)			
<p>近年、組込みシステムの高機能化と共に、個々の機能をパーティショニングして実行したいという要求がある。本研究では、このようなパーティショニング環境で実行される複数の機能が共有して利用するミドルウェアとデバイスを安全に共有するための方式の実現を目的とする。</p> <p>本研究では以下の2種類の研究を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ [1]AUTOSAR BSW に対応した車載統合システム向け CAN コントローラ仮想化手法</li> <li>・ [2]パーティショニング RTOS 向けユーザーモード TCP/IP プロトコルスタックにおける時間パーティショニングに関する研究</li> </ul> <p>[1]は、車載システムにおいて、仮想マシンにより実行される VM 間で CAN コントローラを共有する方法に関する研究である。提案手法では、Dom0 方式と呼ばれる CAN コントローラを制御する VM を用意して、他の VM はこの Dom0 に送受信を依頼する。提案手法の特徴としては、車載システムの標準仕様である AUTOSAR BSW に準拠した CAN コントローラのドライバに対応していることである。これにより既存のソフトウェアを大きく変更することなく、共有が可能となった。</p> <p>[2]は、宇宙機等を対象としたパーティショニング RTOS 向けの TCP/IP プロトコルスタックの共有手法に関する研究である。パーティショニング RTOS ではドメインと呼ばれる単位にアプリケーションを分割して実行する。ドメインはユーザーモードで実行されお互い保護される。提案手法では、TCP/IP プロトコルスタックを独立したドメインで (ユーザーモード) で実行することで、クリティカルな処理を保護する。他のドメインは RTOS の機能を介して TCP/IP プロトコルスタックの代理タスクに処理を依頼し、送受信を実現する。先行研究では性能評価が不十分であること、Ethernet ドライバがカーネルモードで動作しており他のドメインに影響を及ぼすこと、コンフィギュレーション API が未実装という課題が残っていた。本研究ではこれらの課題を解決した。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パツヘ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	AUTOSAR BSW に対応した車載統合システム向け CAN コントローラ仮想化手法	書 名	
雑誌名	情報処理学会研究報告	論 文 名	
巻 号	Vol. 2022-EMB-61, No. 12,	出 版 社	
発行年月	2022 年 11 月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	1-8	ペ ー ジ	
著 者 名	本田晋也	著 者 名	
備 考	済	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	予定あり		
②		②	
論文題目	パーティショニング RTOS 向けユーザーモード TCP/IP プロトコルスタックにおける時間パーティショニングに関する研究	書 名	
雑誌名	情報処理学会研究報告	論 文 名	
巻 号	Vol. 2023-EMB-62	出 版 社	
発行年月	2023 年 3 月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	1-8	ペ ー ジ	
著 者 名	板田怜子, 本田 晋也	著 者 名	
備 考	未（2023 年 3 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	予定あり		
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2024年 2月 29日

氏名	張 漢明	所属	理工学部 機械システム工学科
研究課題	並行プロセス記述デバッグ支援のための誤り軌跡パターンに関する研究		
研究の種類	(個人)	グループ	
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究の目的は、並行プログラムの同期問題に関するデバッグを支援することである。本研究では、並行プログラムの同期問題に特定して、同期問題に対する正しい解法が存在することを前提として、典型的な誤りとその軌跡の関係を定式することにより、プログラム実行時の情報からプログラムの詳細な欠陥を特定することを目指した。</p> <p>並行プログラミングにおいて、システムの障害 (failure) からプログラムの誤り (fault) を特定するデバッグは困難な作業である。並行プログラムのデバッグでは、障害の状況から、障害に至る動作履歴を想定してプログラムの誤りを特定する。並行プログラムではプロセスのコンテキストスイッチが非決定的に切り替わるので、検討すべき動作履歴は単一プロセスに比べて複雑になる。</p> <p>本研究の基本的なアイデアは、プログラムの誤りと軌跡の関係を定式化して、プログラムの動作の軌跡からプログラムの誤りへの対応づけを「誤り軌跡パターン」として提示することである。誤りと軌跡の間への関係は、誤りの構造と軌跡の構造の間で対応づけられると想定した。「誤り構造の集合」から「軌跡構造の集合」への写像を「誤り軌跡パターン」とし、「軌跡構造の集合」から「誤り構造の集合」への写像を「誤り軌跡パターン」と定義する。</p> <p>本研究は以下の手順で研究を進めた。(1)セマフォアを用いた同期問題の解法対象とする。(2)個々の具体的な問題に対して誤りと軌跡の間への関係を定義する。(3)誤りと軌跡の間への関係をパターン化する。具体的な同期問題を対象として誤りと軌跡の間への関係を解析する。具体的な問題を通して、誤りの分類と軌跡の表現を洗練する。その後、誤りの表現を構造化して抽象的な表現を検討する。最後に、誤りと軌跡の間への関係をパターン化する。これまでのデバッグ支援技術に共通する特徴は、アクセスログやトレースログ、メモリダンプを利用し、フォールトの特定や修正に必要な情報を何らかのモデルに基づいて抽象化し、デバッグを実施する開発者にわかりやすく提示していた。本研究では、正しいプログラムの解法が存在することを前提として、プログラムの実行軌跡からプログラムの詳細な欠陥を特定することができることを確認した。VDM-SL との連携および FRAM の記法にの応用することにより、実際のソフトウェア開発で有用な技術と見込まれる。今後、実用的な例を用いて本技術の妥当性を確認することが課題である。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パッヘ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	VDM-SL in Action: A FRAM-Based Approach to Contextualize Formal Specifications	書名	
雑誌名	<i>Proceedings of the 20th Overture Workshop</i>	論文名	
巻号		出版社	
発行年月	2022年7月	出版年月	
ページ	pp. 1-14	ページ	
著者名	Tomohiro Oda <sup>1</sup> , Shigeru Kusakabe <sup>2</sup> , Han-Myung Chang <sup>3</sup> , and Peter Gorm Larsen <sup>4</sup>	著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		



2022年度  
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年 4月10日

氏名	平岩 恵里子	所属	国際教養学部 国際教養学科
研究課題	アジアにおける国際労働力移動の新潮流の研究		
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>掲題研究課題の目的は、人口も移民も多く抱えるアジアの移動空間に着目し、人口ボーナスが消失して送出し国が労働力の供給源となくなった時、国際労働力移動はどのような変化を見せるのか、また、その結果、各国の移民政策やアジアにおける地域経済連携にどのような影響をもたらすのか、新たな移動の様相を生むのか(新潮流)、について考察することであった。どの国も労働力人口の減少に直面すれば、労働力をどこから、どのようにリクルートするか、労働者の出身が国内・国外問わず重要な政策となり、それは労働力市場が今以上にグローバル化することを意味する。</p> <p>したがって、アジア諸国の移民政策(ないし外国人労働者政策)をまずもって考察したが、そこで「移住産業」という概念に出会った。移住産業とは、国境を超えて移動する人々に関わる様々な仲介者(交通手段や就職情報等を提供するブローカーやリクルーター)の総称で、不法/合法を問わず移動を可能ならしめるインフラであると同時に、報酬を目的とした経済活動でもある。国境を超える人の移動は移民政策が所与となるが、移住産業はその政策を具現化するアクターとも言える。1970年代から研究が進んだ概念で、今では移住に関する国際機関や NGO・NGO なども概念に入るようになり、幅広い考察が可能となった。欧米諸国においては、国境管理を民間企業が担っている場合も多く、移住産業は移民政策というコインの裏側とも言える。そのような「移住産業」の論文サーベイをする中で、アジア諸国では、労働力をリクルートし送り出すのは、政府ではなく、民間のリクルーターが担う産業であり、その形態も様々であることが分かってきた。労働者を送り出す国の「送出し機関」がその役を担うと同時に、利潤も目的としている。日本においても、外国人労働者の多くを占める技能実習生も、受入れの仲介する監理団体や外国人技能実習機構があり、監理団体は企業が支払う手数料を利潤としている。</p> <p>アジアにおける労働力移動の空間において、人口ボーナスを謳歌しているのは移住産業のアクターであると考えられることもできると考え、まずは移住産業の研究サーベイを行い、日本の外国人労働者政策を可能ならしめている受入れ機関(外国人技能実習機構と監理団体)も移住産業として捉えるならば、そこに人権保護のスキームが入る余地はなく、問題とされている暴行や賃金未払いなどの人権侵害も必然的だったのではないかと考察を進めて、論文にまとめた。グローバル化するアジアの労働市場の考察は、新年度においても継続したいと考えている。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パツヘ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Migration Industry in Asia: Implications for Japan	書名	
雑誌名	南山経済研究	論文名	
巻号	第37巻 第3号	出版社	
発行年月	2023年3月	出版年月	
ページ	pp. 245-257	ページ	
著者名	HIRAIWA Eriko	著者名	
備考	済・未	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2022年度  
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年 3月 13日

氏名	村杉恵子	所属	国際教養学部
研究課題	ミメティックスと方言から探る文法		
研究の種類	✓個人	グループ	
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b>（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>生成文法理論は、多くの言語に共通する文法の仕組みを明らかにし、言語の多様性を説明することを目標として発展してきている。一方で、未だに擬態語・擬声語や手話などのアイコニックな特徴をもつ言語、ならびに(消えゆく)方言の文法について、その位置付けや言語としての特徴に関して十分に解明されているとは言えない。また、幼児言語の特性からみた普遍文法に関する理論構築も十分なされているとはいえない。本年度は、「ミメティックスと方言から探る文法」パッへプロジェクトとして、以下のような成果を得た。</p> <p>2021年にヨーロッパ言語学会で口頭発表した研究に基づき、研究雑誌 <i>Morphology</i> (出版社: Springer) に研究成果を発表した。昨年度に続き、ZOOM を用いてアイコニックな特徴をもつ言語の文法的特性について秋田喜美氏を中心とする研究会に定期的に参加し、雑誌や料理本などに使われる擬態語擬声語（例:「ゆるかわな」「大根をくたくたと煮込む、大根をくたくたに煮込む」）を題材として研究を行なった。研究会では、Iconicity に関する知見を得、発表にコメントをいただきつつ、議論を積み重ねた。</p> <p>招聘講演（2020年8月16日(日)～8月17日(月)）（東北大学大学院情報科学研究科「言語変化・変異研究ユニット」主催 第6回ワークショップ、東北大学）の内容を修正した上で執筆し、2022年12月12日に開拓社より出版した。今年度は、特に、幼児言語におけるミメティックスの例を加え、論文の精緻化を試みた。</p> <p>また、昨年度まで積み重ねた研究を基礎として、方言（長野・飯田・伊那方言、三河方言などを中心として）について日本語の擬態語擬声語や文末表現に焦点をあて、記述的研究を行なった。特に信州の方言（伊那方言を中心として）の中でも、現在消えつつある文末表現（づら、だら、ら）の文法性について、記述をし、分析を行った。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パッセ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Binomial adjective doublets in Japanese: A Relational Morphology account	書名	コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論3
雑誌名	<i>Morphology</i>	論文名	幼児の言語獲得から生成文法理論へ
巻号	32	出版社	開拓社
発行年月	2022	出版年月	2022
ページ	281-297	ページ	329-357
著者名	Kimi Akita and Keiko Murasugi	著者名	村杉恵子
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年2月13日

氏名	森山 幹弘	所属	国際教養学部
研究課題	インドネシア語教育における上級教材研究：用例研究を中心として		
<p><b>研究実績の概要</b>（研究経過、研究結果を800～1,000字以内で簡潔に記述すること）</p> <p><u>研究経過</u></p> <p>概ね予定していた研究計画に沿って、研究を進めることができた。</p> <p>本研究テーマについては、これまでからインドネシア語教育を実践する中で継続的に研究を行ってきており、すでに収集した文献と知見をもとにさらに問題点と課題を洗い出し検討した。具体的には2021年度の日本インドネシア学会における発表を基に以下の研究経過を踏まえて論文としてまとめることができた。</p> <p>8月には、計画していたオランダでの調査を行うことができ、さらに資料を加えることができたことに加え、理論的な知識を学ぶことができた。具体的な作業として、インドネシアの日刊紙のウェブ版を本研究のコーパスデータとして使用し、このコーパスデータを分析し用例を抽出するために、コンコーダンスソフトを用い、インドネシア語の上級教材として対象語の用法を調べていった。それによって、これまで実施してきた作業から得られた資料の整理を行うとともに、数年前に共同研究によって記述した「インドネシア語基本文法」の項目に沿って頻度、意味、語形成、文型、共起する語などの点について分析を行うことができた。</p> <p>研究の過程では、これまで科学研究費助成事業によって共同研究を行ってきた国内の研究者たちと議論し、資料の分析と研究を深めていくことができた。</p> <p>研究費については、ほぼ当初の予定通りオランダでの調査に使用した。</p> <p><u>研究結果</u></p> <p>これまでインドネシア語教育における上級教材研究では既存の言語研究の成果や文法書、辞書を参照し規範的な用例を中心にした記述がされてきたが、本研究ではコーパスデータを利用して実際に用いられている文例の分析を中心に行うことができた。想定されたように、規範的な文法研究から見えてこなかった点が実際の文例から浮かび上がってきたことから、今回の作業を通じて規範に合致する文例だけでなく、規範から外れるが許容されている用例を分析することによって規範そのものや規範の範囲が変化している可能性があることを示すことができた。</p> <p>一般に、言語研究および言語教育において、規範と実践のどちらか一方のみを見ては不十分であることが指摘されているように、インドネシア語に関しても同様のことが言えることを具体的な例を示しながら論文の中で論じた。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2022年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	コーパス・データを用いた インドネシア語応用教材の開発にお ける課題 Permasalahan dalam pengembangan bahan pengajaran bahasa Indonesia terapan dengan menggunakan data korpus	書 名	
雑誌名	インドネシア 言語と文化 Bahasa dan Budaya: Jurnal Himpunan Peneliti Indonesia Seluruh Jepang	論 文 名	
巻 号	第28号	出 版 社	
発行年月	2022年	出 版 年 月	
ペ ー ジ	pp. 105-122	ペ ー ジ	
著 者 名	森山幹弘、原真由子、降幡正志	著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）

2022年度  
 パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年 3月 31日

氏名	森泉 哲	所属	国際教養学部
研究課題	グローバル・シティズンシップと集団間イデオロギーとの関連		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究課題では、グローバル・シティズンシップとの関連から、既存の集団間関係尺度との関連性の研究結果を報告し、それをまとめた論文を公表することにあつた。本研究課題の意義は、グローバル化する日本社会において、マイノリティ市民の人々も生き生きと今後暮らしていけるため、マジョリティ側の価値観について調査することにより、今後の社会の在り方に対して示唆を与えることができると考えたからである。</p> <p>過去に収集した日本人社会人 450 名に行った質問紙調査の結果を分析し、編者とメールでやりとりをしながら、原稿執筆を行い、最終的に英語論文として原稿を完成させ、無事に出版することができた。世界の読者や研究者に対して日本の現状や今後の社会の在り方の一端について示すことができたと考えている。</p> <p>本研究の質問紙構成は、1) 一人一人が地球市民として責任を持ち行動していく向社会的態度を示すグローバル・シティズンシップ、2) マジョリティとマイノリティの関係性を表し、そのタイプによって、集団間の相違性を認め賞賛する「多文化主義」、その違いを否定する「同化主義」、そしてその違いを無視する「カラーブラインドネス」に関する集団イデオロギーのタイプ、3) 社会的貢献感と人生満足感に関する心理的健康状態、に関する尺度であつた。</p> <p>共分散構造分析の結果、グローバル・シティズンシップは多文化主義とカラーブラインドネスと正の関連がみられたが、同化主義とは負の関連が見られるといった予測通りの結果が得られた。心理的健康との関連では、多文化主義とは正の関連がみられたが、カラーブラインドネスは、負の関連がみられ、特にカラーブラインドネスの結果がこれまで欧米で示された結果とは異なり、日本社会の在り方を示すユニークな結果であつた。</p> <p>特に、「カラーブラインドネス」をめぐるのは、文化（人種）集団の違いを無視し、個人を尊重する概念であるとともに、個人間の普遍性を強調するのか、それとも個人間の多様性を強調するのかによって議論が分かれている。欧米社会では、民族・人種集団間の差別・偏見は顕在的であり、「肌の色の違いは見えない」とするカラーブラインドネスというイデオロギーは、集団間関係性を改善せず、むしろ偏見を助長するという頑健な結果が得られていた(Levine et al., 2012)。一方で、日本社会においては、むしろ「みんな違ってみんないい」という多様性の理想論が語られているような状況であり、結果として「カラーブラインドネス」はポジティブにとらえられていることを証左する結果であつた。ただし、これはむしろ人種に対する感受性が未発達と考えることも可能であり、カラーブラインドネスはただ単に主観的に向社会的態度としているだけであり、社会的統合にむけた社会的変革には十分ではない態度であるとも解釈できる。今後は様々な条件下において、実験的にマイノリティとマジョリティの良好な集団イデオロギーのあり方を検討するまた文化変容モデルとの整合性など、より包括的な集団間関係についてさらに検討を加えていきたい。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2022年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書名	Globalized Identities: The Impact of Globalization on Self and Identity
雑誌名		論文名	Can Global Citizens Contribute to Japan's Local Society?
巻号		出版社	Palgrave Macmillan
発行年月		出版年月	2022年7月
ページ		ページ	pp. 245-271
著者名		著者名	森泉 哲
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）



## 2022年度 パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年4月8日

氏名	山岸敬和	所属	国際教養学部
研究課題	日米の医療制度改革と新型コロナウイルス感染症		
研究の種類	<input checked="" type="checkbox"/> 個人 <input type="checkbox"/> グループ		
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究は、平成 26~30 年度に行った科研費基盤研究 (C) 「アメリカ医療制度改革の執行過程」、またこれまでのパッへ研究奨励金 I-A-2 によって行ってきた日本の医療制度についての研究を発展させるものである。基盤研究 (C) では、アメリカにおいて 2010 年 3 月に成立した患者保護および医療費負担適正化法の執行過程を研究した。また日本については、明治時代からの医療政策の歴史的発展について、特に明治初期と第二次世界大戦の時期に行われた改革の影響に注目して政治学的視点から分析を行ってきた。</p> <p>この日米の医療制度は、新型コロナウイルスという言わば新しい「外生的要因 (exogenous shock)」によって、その問題が浮き彫りになった。アメリカでは、無保険者問題や、保険を持っていても多額の免責額を負担しなければならないいわゆる低保険者の問題が改めて問われている。日本では、医療保険についての大きな問題は起こっていないが感染者を収容するための病院が整備されていないことが問題となっている。日米共通の問題として、このような感染症が起こった時に、誰がどのように政策決定の判断を下すのか、そして、政府と民間団体がどのように協力して、どのような医療サービス提供システムによって対応するのかという事が問われている。</p> <p>新型コロナウイルスによって、日本は繰り返し「医療危機」が言われた。ポスト・コロナに向けて、この状況どのように振り返り、新たな改革に結びつけていくのかが注目される。本研究は、日米における既存の医療保険制度改革の文脈を、新型コロナウイルスという「外生的要因」がどのように変化させたのかを理解しようとするものである。</p> <p>2022 年度 4 月に刊行された、Takakazu Yamagishi, <i>Health Insurance Politics in Japan: Policy Development, Government, and the Japan Medical Association</i> (Cornell University Press, 2022) が本研究の成果として位置付けられる。これは、明治維新时期と第二次世界大戦期 (占領期を含む) を、日本の医療保険政策史の中での決定的転機として、政策発展の過程をまとめたものである。また、笹川平和財団の研究プロジェクトである「アメリカ現状モニター」のために執筆しているコラムも成果として含まれる。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2022 年度南山大学パッへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書名	Health Insurance Politics in Japan: Policy Development, Government, and the Japan Medical Association
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	Cornell University Press
発行年月		出版年月	2022
ページ		ページ	234
著者名		著者名	Takakazu Yamagishi
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2024年2月26日

氏名	吉田 信	所属	国際教養学部国際教養学科
研究課題	人の移動と感染症をめぐる歴史的研究：巡礼旅券による移動の制度化と身体の管理		
研究の種類	個人	グループ	
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b>（研究経過、研究結果を800～1,000字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>2022年度は主に国内外での史資料の収集につとめ、それらの解読を進めていった。対象とした史資料は、19世紀中葉から20世紀初頭のメッカ巡礼に関する行政資料である。特にメッカ巡礼に際して発給されたメッカ・パスの様式およびその使用済み旅券、さらに巡礼の管理を目的とした各種の政令を中心に収集した。</p> <p>しかしながら、収集した史資料の解読に多大な時間を要しており、2022年度中に印刷された研究成果物を公刊することができなかった。</p> <p>その後も今日に至るまで史資料の解読を進めているところ、ひとまず2023年度にはインドネシア研究者による懇話会である KAPAL において中間的報告をおこなうところまでこぎつけることができた。</p> <p>研究会では「メッカ・パスの変遷にみる巡礼の制度化：Mecca Pas or how to regulate the Hajj」と題する報告をおこなった。報告ではメッカ巡礼におもむく巡礼者に対して発給されるメッカ・パスの変遷を整理し、巡礼旅券の展開から巡礼がどのように制度化されていたのかを明らかにした。</p> <p><a href="https://kapal-indonesia-jepang.net/konferensi/konferensidepan/konferensi5/konf5-acara/">https://kapal-indonesia-jepang.net/konferensi/konferensidepan/konferensi5/konf5-acara/</a></p> <p>今後は7月末から8月初旬にインドネシアのスラバヤで予定されている国際会議で同内容の報告をおこなった後、これまでに寄せられたフィードバックを反映しつつ2024年度中に研究成果を論稿としてまとめる予定である。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2022 年度南山大学パッセ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

**2022**  
**Pache Research Subsidy I-A-2 (Specified Research Support:  
 General) Research Result Report**

Date: December 20, 2022

Name	Brad Deacon	Affiliation	Faculty of Global Liberal Studies
Research theme	Assessing the impact of an online short-term study-abroad program on Japanese university students' global-mindedness		
<p>Summary of research achievements (Please write down the progress and achievements of your research briefly within 320 ~400 words.)</p> <p>This mixed-methods research aimed to help fill a gap in global-mindedness literature by investigating the global-mindedness development of Japanese university students who participated in a virtual study-abroad program.</p> <p>I presented a paper entitled “What Is the Impact of a Virtual Study-Abroad Program on Japanese University Students' Global-Mindedness?” at the 4th Canadian International Conference on Humanities and Social Sciences (HUSO) on June 25, 2022 in Toronto, Canada. In addition, I presented a paper online entitled “Assessing the Impact of an Online Study Abroad Program on Global-Mindedness” at the 48th Annual International Conference on Language Teaching and Learning &amp; Educational Materials Exhibition that is run by the Japan Association for Language Teaching (JALT) on November 13, 2022. The feedback from the audience was positive and I made a valuable contact at the former conference with Dr. Lorenzo Cherubini from Brock University in the Faculty of Education in Hamilton, Ontario, Canada, who is also active in the intercultural competence research field. I also made a valuable contact at the latter conference with Dr. Andrew Nowlan from Kwansei Gakuin University in Japan, who is active in the intercultural competence research field.</p> <p>I co-published a paper with Professor Richard Miles in the Faculty of Global Liberal Studies entitled “Assessing the impact of a virtual short-term study-abroad program on Japanese university students' global-mindedness” in the <i>Journal of Virtual Exchange</i>. This publication will be in the 2022 Volume 5 edition of the journal , pp. 155-175. This mixed-methods study employed experimental (<math>n = 53</math>) and control (<math>n = 82</math>) groups to investigate the following research question: What is the impact of a virtual STSA program on the GM of participating students? This article clearly references the generosity of the “2022 Nanzan University Pache Research Subsidy I-A-2” in the Acknowledgments at the end of the article.</p>			

## Published Research Results (Proposal included)

Please write down the published researches with clear indication of subsidy support, “2022 Nanzan University Pache Research Subsidy I-A-2”. Please indicate whether the publication has been turned into the Education Planning & Research Promotion Office or not on the “Remarks” column.			
Category of “Magazines”		Category of “Books”	
<b>①</b>		<b>①</b>	
Title of the article		Title of the book	Journal of Virtual Exchange
Title of magazine		Title of the article	Assessing the impact of a virtual short-term study-abroad program on Japanese university students’ global-mindedness
Volume #		Publishing company	University of Groningen Press
Published date		Published date	12/2022
Page		Page	p.155-175
Author		Author	Brad Deacon & Richard Miles
Remarks	Done • Not yet (Turn in by: )	Remarks	Turn in by: 12/20/2022
<b>②</b>		<b>②</b>	
Title of the article		Title of the book	
Title of magazine		Title of the article	
Volume #		Publishing company	
Published date		Published date	
Page		Page	
Author		Author	
Remarks	Done • Not yet (Turn in by: )	Remarks	Done • Not yet (Turn in by: )
<b>③</b>		<b>③</b>	
Title of the article		Title of the book	
Title of magazine		Title of the article	
Volume #		Publishing company	
Published date		Published date	
Page		Page	
Author		Author	
Remarks	Done • Not yet (Turn in by: )	Remarks	Done • Not yet (Turn in by: )

2022年度  
 パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2023年 1月 23日

氏名	Richard Miles	所属	国際教養学部
研究課題	<b>The Rhetorical Techniques and Approaches Employed by Japanese Climate-Change Activists</b> パッへ 1-A-2		
研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)			
<p><b>Outline</b></p> <p>This study analyzed the English language rhetorical techniques employed in public speeches by four current Japanese activists. Four speeches (two delivered by experienced speakers and two by inexperienced speakers) were analyzed in this study through the use of Rowland's (2019) categories of language strategies. The core research question in this study was: What rhetorical techniques are utilized by Japanese activists to enhance their English language speeches? A qualitative approach was adopted for the analysis.</p>			
<p><b>Research to date</b></p> <p>This research study analyzed the following four speeches.</p>			
Activist	Speech information		
Shina Tsuyuki (High school student)	“The Power of our Choices as Consumers”, Graduation speech, 2019, <a href="https://www.youtube.com/watch?v=Ryb9ZI7yeWc">https://www.youtube.com/watch?v=Ryb9ZI7yeWc</a>		
Seena Katayama (High school student)	“How an Activist is Just Like a Rainbow”, TEDxYouth@Tokyo, 2018, <a href="https://www.youtube.com/watch?v=4IybRyONuek">https://www.youtube.com/watch?v=4IybRyONuek</a>		
Naoko Ishii (Economist)	“An Economic Case for Protecting the Planet”, TED Talk, 2017, <a href="https://www.ted.com/talks/naoko_ishii_an_economic_case_for_protecting_the_planet/transcript">https://www.ted.com/talks/naoko_ishii_an_economic_case_for_protecting_the_planet/transcript</a>		
Shiori Ito (Journalist)	“黒箱/假如没人能谈论性侵，那就由我来做这件事吧” (Black Box: If No One Can Talk About Sexual Assault, Let Me Do It) YiXi Conference presentation, 2019, <a href="https://www.youtube.com/watch?v=p4dYkAW53dc">https://www.youtube.com/watch?v=p4dYkAW53dc</a>		
<p>The findings and implications were drawn up, with the results presented at two international conferences: <i>Drawing Pedagogical Implications from a Rhetorical Analysis of L2 Public Speeches</i>, at The 24th International Conference and Workshop on TEFL &amp; Applied Linguistics, at Ming Chuan University, Taipei, Taiwan, 17/3/2023, and <i>The English Language Rhetorical Techniques Employed by Japanese Activists</i>, at CLaSIC 2022, National University of Singapore, Singapore (online), 2/12/2022.</p>			
<p><b>Results</b></p> <p>Findings indicate that even though the Japanese activists were speaking in their second language (English), they employed many of the traditional English language rhetorical techniques commonly used in speeches. Subtle differences also distinguished one of the experienced speakers from the other speakers. The educational implication drawn from this finding is that English language rhetorical techniques should be more widely taught in L2 classes.</p> <p>A follow up study is being planned for 2023 to ascertain if other Japanese activists employ similar techniques.</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2015 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	The rhetorical techniques employed by Japanese activists	書名	
雑誌名	<i>Foreign Language Education in the 21st Century: Review, Re-conceptualise and Re-align</i>	論文名	
巻号		出版社	
発行年月	2022/12	出版年月	
ページ	pp. 55-66 (12 pages)	ページ	
著者名	Richard Miles	著者名	
備考		備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）



2022年度  
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

年 月 日

氏 名	林 慎将	所 属	国際教養学部
研究課題	構造/音形が異なる要素間に与えられるコピー解釈の研究		
研究の種類	個人	グループ	
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>近年の生成文法理論では、従来要素が移動する際に作られると考えられてきたコピーの概念が見直され、その関係を如何に付与するかが盛んに議論されている。本研究は、Chomsky (2021) により提案されたコピー形成操作の適用方法を考察し、コピー関係のより核心的な理解に迫ることを目標とした。</p> <p>2022 年 5 月に行われた Okayama Linguistics Forum では、日本語関係節に見られる the highest clause sensitivity と呼ばれる現象をコピー形成操作の観点から分析し、コピーとされる要素が再構築を受けるためには、要素間の関係が同じ種類のコピー関係であることが必要であることを提案した。また、更に研究を発展させたものを、2022 年 8 月に行われた GLOW in Asia XIII 及び、2023 年 3 月に行われた 30th Japanese/Korean Linguistics Conference にて発表した。これらの発表では、関係節の派生のみならず、日本語の関係節が話題化と似ている解釈を持つ事実等の説明も行った。</p> <p>2023 年 1 月に刊行された『アカデミア 文学・語学編』では、従来のコピー概念を拡張し、構造/音形が異なる要素間においても、意味解釈においてはコピーとみなせる可能性を提案し、英語の関係節において、<i>wh</i> 演算子が関係節主要部と同一の解釈が強制される事実をコピー形成操作の下から導いた。更に、ドイツ語の部分的 <i>wh</i> 移動において、スコープマーカと <i>wh</i> 演算子との間にコピー関係が存在すると考えることで、何故文頭に移動していない <i>wh</i> 演算子が疑問文解釈を生み出すのかに対する解答を与えた。この研究から着想を得て、現在は提案を日本語のスクランプリング現象まで拡張させた研究を計画している。要素の適切な移動のためには移動先での一致が必須であるとするラベル理論の下では、一致が無い日本語において自由語順を許すスクランプリングが何故可能であるのかが問題とされてきた。構造/音形が異なる要素にコピー関係を認める本研究の立場に従えば、日本語に見られる格助詞と時制マーカ/動詞との間にコピー関係を想定することが可能となる。格助詞がこれらの要素の下位のコピーとみなされることで、ラベル付けのための最小探索には不可視となり、格助詞を持った要素がスクランプリングを通して自由に移動可能になることが理論的に導かれる。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2022 年度南山大学バツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Accessibility on Reconstruction: Japanese Head-External Relative Clauses by Form Copy	書名	
雑誌名	Proceedings of The 13th Generative Linguistics in the Old World in Asia (GLOW in Asia XIII)	論文名	
巻号	2022 Online Special	出版社	
発行年月	2022年12月	出版年月	
ページ	106-116	ページ	
著者名	Norimasa Hayashi	著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
 パツへ研究奨励金 I-A-1 (特定研究助成・特別)研究成果報告書

2023年 1月 21日

<b>氏名</b>	深川 裕佳	<b>所属</b>	法務研究科
<b>研究課題</b>	売買を原因とする債権譲渡（ファクタリング）の現代的問題について		
<b>研究の種類</b>	個人	グループ	
<b>共同研究者</b>	なし		
<b>研究実績の概要</b> （研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）			
<p>本研究では、売買を原因とする債権譲渡（ファクタリング）の今日的問題について検討した。具体的には、給与ファクタリングとよばれる違法貸付が挙げられる。これは、コロナ禍で広がった給与債権の売買を装ったヤミ金融であり、すでいくつかの裁判例によって違法・無効な取引であることが明らかにされている。また、近年、類似の問題として「事業向けファクタリング」とよばれる、事業者間の売掛代金債権の売買を装った違法貸付も問題として指摘されている。しかし、これらの違法な取引のいずれについても、その理論的分析が十分になされていない状況にある。</p> <p>そこで、本研究では、裁判例を検討することによって、売買に基づく債権譲渡（ファクタリング）形式をとる契約であっても、実質的には金銭の貸付け又は消費貸借として契約全体が無効になる場合、及び、金銭消費貸借として契約のうちの一部が無効になる場合があり得ることを検討した。</p> <p>本研究の結果、給与ファクタリングについても、事業者向けファクタリングについても、ファクタリングの形式をとっているにせよ、客観的にみて、譲渡債権の債務者ではなく、債権譲渡人から金銭を回収することを予定する仕組みになっているものについては、貸金業法 2 条 1 項にいう「金銭の貸付け（手形の割引、売渡担保その他これらに類する方法によってする金銭の交付）」及び同法 42 条 1 項に規定される「金銭を目的とする消費貸借の契約（手形の割引、売渡担保その他これらに類する方法によって金銭を交付する契約を含む。）」に該当するものとして、ファクタリング業者が設定した債権買取金額と買取債権の額面金額との差額から計算される利率が年 109.5 パーセントを超える場合には、当該契約は無効と考えられる。</p> <p>以上の研究成果は、論文（深川裕佳「ファクタリングを装う違法な貸付けについて：給与ファクタリング・事業者向けファクタリングを中心に」南山法学 45 巻 3・4 号（2022 年）19-57 頁）として公表した。</p> <p>なお、本研究の当初の予定では、後払い決済サービスについても研究対象を広げ、その研究成果を論文としてまとめる予定であったが、これについては、現在、本研究成果に基づく発展的な課題として位置づけて研究を進めていくことを予定している。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2021 年度南山大学パツヘ研究奨励金 I-A-1」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	ファクタリングを装う違法な貸付けについて：給与ファクタリング・事業者向けファクタリングを中心に	書名	
雑誌名	南山法学	論文名	
巻号	45巻3・4号	出版社	
発行年月	2022年8月	出版年月	
ページ	19-57頁	ページ	
著者名	深川裕佳	著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2024年 2月 20日

氏名	洞澤秀雄	所属	法務研究科(2023年度まで)、 中央大学法学部(現在)
研究課題	公共空間を含む都市空間における当事者自治と公法:イギリス法との比較法研究を通じて		
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を800~1,000字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究の研究課題は、都市の公共空間について、私人による自治的な取組みを行政が促すといった場面に関して、当事者自治と公法の関わりといった観点から、比較法研究を行おうとするものである。</p> <p>こうした研究課題に係る研究経過と現状は次の通りである。この分野は法実務の展開が早いので、まず日本の法と実務の現状を整理し分析をすることとした。公共空間の管理に係るエリアマネジメントとそれに係る都市再生特別措置法を取り上げて、批判的に考察をした論文を好感した。洞澤秀雄「エリアマネジメントと法:都市再生特別措置法における都市再生推進法人、占用許可特例を中心に」南山法学45巻3・4号(2022年)。同論文では、事業者の当事者自治による公共空間の管理とそれを支援する法的枠組みにおいて、事業者と行政との距離といった観点から分析し、当事者自治に対する公法のアプローチについて考察を深めた。</p> <p>次に、公共施設とは少し離れるが、都市空間における脱炭素について、イギリス法との比較で考察をし、環境法政策学会で報告をするとともに、論文として公刊した。洞澤秀雄「脱炭素における都市法の果たす役割:イギリス法との比較を通じて」南山法学46巻3・4号(2023年)。同論文では、脱炭素という国家目標を達成するために、都市空間とそれに係る法がどこまで寄与しうるかとともに、その限界について考察をした。</p> <p>その後、公刊予定ではあるが、公共空間に係る当事者である事業者と行政とのかかわりとして、公共貢献を取り上げてイギリス法との比較研究を進めた。洞澤秀雄「都市開発における公共貢献に係る法的考察:イギリスにおける計画協定・計画義務、地域インフラ負担金を参照して」法学新報130巻(2024年)予定(次頁には記載していない)。同論文では、開発において公共空間の整備と管理を含めた貢献を事業者が約することで、行政が開発の容積率を緩和する「公共貢献」を分析した。当事者である事業者と行政との関わりが不透明になされる点などを、比較法を通じて検討した。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	「エリアマネジメントと法：都市再生特別措置法における都市再生推進法人、占用許可特例を中心に」	書名	
雑誌名	南山法学	論文名	
巻号	45巻3・4号	出版社	
発行年月	2022年9月	出版年月	
ページ	59-96頁	ページ	
著者名	洞澤秀雄	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目	「脱炭素における都市法の果たす役割：イギリス法との比較を通じて」	書名	
雑誌名	南山法学	論文名	
巻号	46巻3・4号	出版社	
発行年月	2023年9月	出版年月	
ページ	69-101頁	ページ	
著者名	洞澤秀雄	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2022年度  
 パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年4月6日

氏名	永江亘	所属	法務研究科
研究課題	支配株主による締め出し合併における経営判断原則の適用条件		
研究の種類	個人		
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>2013年のデラウェア州最高裁の MFW 判決は、支配株主による締め出し合併に際し、特別委員会の設置と、少数株主の過半数の同意があれば、経営判断原則が適用されることを示した。その際に示された要件は、「①支配株主が取引の進行を、特別委員会の賛成と少数株主の過半数の賛成に条件付け、②特別委員会が独立であり、③特別委員会が、自由に自身の助言者を雇うことができ、かつ拒否権を付与されており、④特別委員会がその注意義務を履行し、⑤少数株主の投票が情報に基づいたものであり、⑥少数株主に対する強圧性がない」ことである。本研究の研究対象とした、Flood v. Synutra Int'l, Inc., 195 A.3d 754, (Del. 2018)(以下、「本判決」)は、MFW 判決が①の要件にかかり、当該条件付けを「当初より (ab initio)」要求していたことにつき、具体的にどの段階で支配株主による要件の充足が必要となるかについての判断を示した点に意義を有する。</p> <p>近年の米国では、M&amp;A に関連して提起された訴訟の数の激増と、当該訴訟のほとんどが和解に終わるものであり、株主の利益を保障できていないことへの司法当局の問題意識が指摘されており、本判決も MFW 判決と同様、根拠の低い訴訟を抑制する効果を持つものと評価できる。</p> <p>本研究では、支配株主による締め出し合併に係る判例の状況・変遷を明らかにしたうえで、本判決の内容を精査し、学説・判例の議論を整理した。</p> <p>本研究の成果は、成果論文として、下記雑誌に掲載予定である。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
「2022 年度南山大学パッセ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。			
①		①	
論文題目	支配株主による締め出し合併における経営判断原則の適用条件と「当初より (Ab initio)」の意義	書名	
雑誌名	旬刊商事法務	論文名	
巻号	未定	出版社	
発行年月	未定	出版年月	
ページ	未定	ページ	
著者名	永江亘	著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	予定なし		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		



2022年度  
 パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

年 月 日

氏 名	森山 花鈴	所 属	社会倫理研究所
研 究 課 題	自殺予防における女性支援・自死遺族支援に係る研究		
研 究 の 種 類	個人	グループ	
共 同 研 究 者			
<p><b>研究実績の概要</b> (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>日本における年間の自殺者数は、現在 2 万人を超えており、2020 年にはこれまで減少傾向にあった自殺者数が増加し、2020 年・2021 年は続けてコロナ禍において女性の自殺者数が増加した。男性の自殺者数が増加せず、女性の自殺者数が増加するのは警察庁の統計開始以来、極めてまれな事態である。日本の自殺死亡率（人口 10 万人当たりの自殺者数）は、先進 7 各国の中でも 1 番目に自殺者数が高くなっている。</p> <p>日本では、女性の自殺者数が増加しているだけでなく、コロナ禍により、特にこれまで自殺で家族を失った方（以下「自死遺族」という）は、死別の別れを十分にすることができず、さらには感染拡大予防のために自死遺族同士の「分かち合いの会」を実施することができなくなっている。政策的に見ると、日本では 2006 年に自殺対策基本法が成立後、2007 年に国の計画である自殺総合対策基本法が策定されているが、2022 年は、自殺総合対策大綱が改正される年であり、愛知県・名古屋市でも自殺対策に関する計画の改正が行われた。</p> <p>ただし、これまで自殺予防における女性支援の実態把握や、自死遺族支援の研究もこれまであまり行われてこなかったため、本研究では、女性支援や自死族支援を行っている方（主に京都・大阪在住）や、自死遺族に対してインタビュー調査やアンケート調査を実施した上で、自殺対策における女性支援・自死遺族支援の在り方について検討した。</p> <p>コロナ禍における自殺対策や自死遺族支援に関する情報の整理をし、NPO が主催する自殺予防における女性支援のための情報提供サイト、そして自死遺族向けの支援のための情報提供サイト（ウェブサイト）の構築にも協力した。研究内容としては、過去に実施してきた研究に引き続き、①研究協力者・関係者からのインタビューおよび②関係者との意見聴取を実施し、対面・オンライン上のプラットフォームを構築しながら、特にコロナ禍における自殺対策に係る女性支援・自死遺族支援の調査およびウェブサイトの構築（③）を行った。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	コロナ禍における自殺対策	書名	
雑誌名	最新精神医学	論文名	
巻号	第27巻第6号	出版社	
発行年月	2022年11月25日	出版年月	
ページ	pp.407-412	ページ	
著者名	森山花鈴	著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		

2022年度  
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2023年 4月 4日

氏名	飯田祥明	所属	体育教育センター
研究課題	対人スポーツ種目における時空間的リズムの特徴に関する研究		
研究の種類	個人		
共同研究者			
<p><b>研究実績の概要</b>（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>リズム動作の巧みさは、ダンスや音楽といった個人で実施する運動のみならず対人競技などの多くのスポーツにおいても重要な要素であると考えられてる。また、対人スポーツのパフォーマンス向上を目指して、様々なリズムトレーニングが実施されている現状もある。しかしながら、対人スポーツにおける動作の時空間的リズムの特徴や個人で実施するリズムトレーニングの有効性の裏付けとなるような科学的知見は十分に確認されているとは言えない。そこで本研究は実験的根拠が不足している対人スポーツ種目における時空間的リズムについて、バスケットボールにおける表拍子ドライブと裏拍子ドライブの動作の運動学的な特徴を比較することを目的とした。</p> <p>3x3 を専門とするプロバスケットボール選手に実験依頼をおこない、本学体育センターにおいてモーションキャプチャシステムを用いた表拍子ドライブ動作、裏拍子ドライブ動作の撮影をおこなった。その後、股関節、膝関節、足関節、肘関節、手部についてキネマティック分析を行い、以下の結果を得た。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 手部の下降と身体の全身が同期する表拍子ドライブに対して、裏拍子のドライブ動作は肘関節が屈曲しながらドリブルする手が上昇してボールの位置が高い状態で前進する動作であった。</li> <li>2. 裏拍子ドライブはドリブル手の上下運動が表拍子ドライブと比較して多様なパターンを示し、動作遂行が不安定になりやすい動作であることが示唆された。</li> <li>3. 裏拍子ドライブにおいては、股関節及び足関節から効率的な力発揮に有効とされる運動パターンの消失がみられ、この動作変容によって上肢の下降と身体の前進開始のタイミングに時間差が生じていると推察された。</li> </ol> <p>これらの結果から、手およびボールの下降と前進が同期した安定した運動パターンである表拍子ドライブに対して、裏拍子ドライブは効率的な下肢のコーディネーションをあえて崩すことで手およびボールの下降と前進に時間差を生じさせる運動パターンであることが示された。</p>			

## 研究成果公刊（計画を含む）

「2022 年度南山大学パッヘ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育企画・研究推進課に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	日本人プロバスケットボール選手における表拍子・裏拍子ドライブ動作の比較～キネマティックな差異に着目して～	書名	
雑誌名	アカデミア 人文自然科学編	論文名	
巻号	26	出版社	
発行年月	2023年 6月頃予定	出版年月	
ページ	未定	ページ	
著者名	飯田祥明	著者名	
備考	済・未（ 2023年 6月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	予定あり		
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
DOI			
オープンアクセス	済・予定あり・予定なし		